盗賊ブレイブ@海賊の犬

ブレイブ&秋留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
盗賊ブレイブ@海賊の犬

【Ｎコード】
Ｎ０３３４Ｄ

【作者名】
ブレイブ＆秋留

【あらすじ】
【ブレイブシリーズ４】港町ヤードからアステカ大陸への中継地点であるデズリーアイランドに到着した一行は、海賊に破壊された船の修理が終わるまで、この島に滞在する事になった。十一月だというのに暖かな気候と白い砂浜。海賊を引き渡したお金で懐も温かい。リッチな気分で高いホテルに泊まり、今まで食べれなかった肉を食べる。すっかりバカンス気分で羽を伸ばしていたブレイブ達だが、獣人化の進んだカリューが暴走し……。果たしてカリューはどうなってしまうのか？！

プロローグ

「ウオオオオオン」
「ヒヒヒーン」
砂浜を走り回る二匹の獣。
海に浮かぶ小さな島、デズリーアイランドは十一月に入ったというのに十分に暖かい。この気候ならまだまだ海で泳いだり砂浜でバーベキューをしたりしても問題無さそうだ。
それにしても……。
この島に着いてからあの二匹は走り続けている。確かに約一週間ぶりの大地に俺も感動しているわけだが、奴らは元気が良過ぎる。
「さっきまで船酔いに苦しんでいたとは思えないハシャギっぷりだよね」
隣で砂浜に転がっている貝殻を集めているのは幻想士の秋留だ。
幻想士は不思議な動きや呪文で相手を惑わす事が出来る。詳しい事は全然知らないが、人の気持ちを落ち着かせたり操ったり出来る便利な術があるようだ。
ただし、俺にとっては秋留の事を見ているだけで気持ちが落ち着かなくなる。それ程に秋留の容姿は素晴らしい。幻想士とはまるで秋留のためにある職業のようだ。
太陽の下で輝くピンク色の髪、透き通るような肌、強い日差しにより上気した頬、短めのスカートから覗く魅惑的な太腿……。
「いたっ！」
突然俺の頬に鋭い痛みが走った。
「また変なこと考えてたでしょ？」
秋留が白い眼をして言う。秋留が背中に装備している真っ赤なマントが風もないのに大きく揺れた。
秋留の巧みな話術により手懐けられたモンスター、ブラッドマントのブラドーだ。

こいつは主人である秋留を守るためなら同じパーティーの仲間ですら攻撃してくる危険な奴だ。俺が秋留に対して邪な考えを巡らせていると途端に襲い掛かってくる。想像くらい自由にさせてくれてもいいのに、ブラドーはそれさえも許してくれない。というか、なぜ俺が邪な考えをしている事がバレるのか不思議でしょうがない。

『顔に出てるんだよ』

最近秋留に言われた台詞だ。今度秋留の事を考えながら鏡を見てみよう。

「おや？　この頬の傷はどうしたのですかな？」

荷物を持った初老の男が俺の隣に来て言った。

パッと見は五十歳くらいだろうか。淡い水色の鎧を上品に着こなしているが、その身体から漂うオーラはなぜかドス黒い。俺達若いパーティーの保護者的な存在である聖騎士のジェットだ。

「は～っくしょい！」

ジェットが豪快なクシャミをする。

船旅の最中に海に転落して以来、ジェットは風邪を引いている。年寄りの病気は長引くからなぁ……、と普通なら考えるのだがジェットの場合は別だ。

「ゾンビなのに風邪引くなんてオカシイよなぁ？」

小声で隣の秋留に聞いたが苦笑いが返された。

ジェットはゾンビなのだ。聖騎士なのにゾンビとはチグハグな感じがする。

更に衝撃的な事実としては、可愛い顔をしたこの秋留がジェットをゾンビとして復活させた張本人だという事だ。秋留は魔法を基本とした数々の職業に就いた事がある。ジェットを蘇らせたネクロマンシーの力も過去にネクロマンサーとして冒険をしていた時の名残だ。

「ほっほ～。銀星も久々の地面に大ハシャギですな」

銀星とは砂浜を元気に走り回っている獣のうちの一匹だ。ジェットと同様、秋留によって蘇ったゾンビ馬だ。

そのゾンビ馬が嬉しそうに秋留に近づいてきた。その口には綺麗な貝殻をくわえている。
「わぁ。ありがとう銀星～。綺麗な虹色の貝殻だね」
秋留はそう言うと、銀星の長い顔にキスをした。
両目をハートにして銀星が再び砂浜を走り出す。ちくしょう、銀星め。秋留の唇を簡単に奪いやがって。
俺は綺麗な貝殻が落ちていないか、辺りを見渡した。
遥か彼方にピンク色に輝く貝殻が光っているのが見える。そのピンクの色は秋留の髪の色のように綺麗で透き通って見える。
「ブレイブ～、そういうの、宝の持ち腐れって言うんだよ」
秋留が俺の事をまたしても白い眼で見ながら言った。どうやら俺の魂胆はバレバレのようだ。
ちなみに秋留の言った宝とは俺の能力の事だ。
何を隠そう！
俺は！
盗賊なのだ！
遥か彼方に見える小さな貝殻から、目の前にいる女神の輝く髪の毛の一本一本までもを、詳細に観察する事が出来る。盗賊になるには並外れた洞察力と観察力が必要なのだ。それがないとお宝に仕掛けられた罠により簡単に命を落とす事になりかねない。ちなみに俺はその辺に転がっている様な平凡な盗賊とは違う。
俺は両腰のホルスターに収まっている金と銀の銃を取り出して、遠くを走り回っている青い毛並みをした獣に照準を合わせた。
発射音がしてすぐに、獣の足元の砂が舞った。
走り回っていた獣がその場に転がる。俺には銃士にも負けない程の射撃の腕があるのだ。
「ひっど～い」
そうは言っているが秋留は楽しそうだ。
今転がったばかりの獣が猛然と俺に向かってきた。
「ぶ～れ～い～ぶ～」

何と獣が喋った！
四本足で走っていた獣が俺の目の前で二足歩行になると、両前足で俺の胸倉を掴んできた。
「俺を狙うとは良い度胸だな」
「悪い、手が滑った」
「何を狙おうとして手が滑ったのか詳しく聞かせてみろ！」
「あはは……」
俺は頭を掻いて誤魔化した。
目の前にいる真っ青な毛並みをした二足歩行の獣、つまり獣人であるカリューは俺達パーティーのリーダだ。見た目はリーダーというよりは獣人盗賊団の頭のようだが、うざい程の正義感があり熱血一直線の性格を持っている。
何ヶ月か前までは立派な人間だったのだが、様々な不幸が重なって今は獣人街道まっしぐらの生活を送っていた。
四本足で走ったり全身の毛を舐めて綺麗にしているところは、獣人が板についてきたと言える。
「お～い！　こっちを手伝ってくれ～」
遠くで船員が俺達を呼んだ。
このデズリーアイランドまで俺達を運んでくれた船の船員達が、悪海賊達を連行しようとしているらしい。
この島に辿り着くまでに数々の冒険があった。
嵐を乗り越え、巨大タコモンスターと戦い、凶暴な海賊団と死闘を繰り広げた……。あの時の戦闘が激しすぎたせいで俺達はまだ身体の調子が悪い。この島で船の修理を行う間に十分な休養を取る予定だ。
俺達は頑丈な縄で縛り付けられた海賊達を、この島の治安維持協会に引き渡すのを見守った。奴らが逃げ出したら即行で痛めつける段取りだ。
海賊達の一人が俺達を強烈な視線で睨みつけている。海賊団の幹部ガロンだ。奴は散弾銃で俺達を苦しめたがカリューとの一騎打ち

で討ち倒された。凶暴なカリューの攻撃で死ななかったのは奇跡に等しい。
その後ろで小さくなっているのは獣使いのラムズだ。こいつは大人しい性格のため間違っても暴れたりはしないだろう。
「おお、おお。こりゃまた大量だな！」
遠くから治安維持協会員達がゾロゾロと近づいてきた。恐らく真ん中を歩いている悪党面をした男がこの島の治安維持協会・支部長だろう。
「俺様は治安維持協会・デズニーアイランド支部長のタイガーウォンだ」
偉そうにタイガーウォンと名乗った男が右手を差し出した。
俺達パーティーのリーダーである獣人カリューがタイガーウォンの右手をシッカリと握って豪快に振る。
タイガーウォンもまさか獣人がリーダーだとは思わなかったらしく、握られた手を見ながら露骨に嫌な顔をした。
「ウオッホン！　それでは治安維持協会の方へ来て頂いても良いですかな？」
元々この海賊達は、船に乗っていた船員と謎の武具商人夫婦の協力があって捕まえられたのだが、治安維持協会との話し合いは俺達パーティーに一任されていた。
俺達はタイガーウォンと他の治安維持協会員の後について歩き出した。

デズリーアイランドの治安維持協会は、海に浮かぶ島に相応しくカラフルな建物をしている。他の大陸の治安維持協会の建物は事務的な外見だったが、この島のは真っ赤なレンガに鮮やかな緑色の屋根をしていた。入り口の両脇には謎の仮面の置物まである。
「この島の守り神、ムォークムォーク大神様です」
治安維持協会員の一人が言った。何とも胡散臭い名前だ。
俺達は応接室に通され、座り心地の良いソファーに座った。暫く

するとタイガーウォンが大きな鞄を抱えて部屋にに入ってきた。
「いやはや、驚いたぞ。まさかノニオーイ海賊団を壊滅させる者が現れるとはな！」
タイガーウォンが豪快に笑った。唾が目の前の机に飛び散る。俺はこいつの事は全く好きになれそうにない。
「ノニオーイの野郎はどうした？」
「今頃は魚の餌かな」
俺は奴の事を思い出して少しムカついた。あいつは俺の秋留の首を思いっきり蹴飛ばしたのだ。秋留はそのせいで時々痛そうな顔をする。
「殺した……という事か？」
タイガーウォンが俺の事を睨んだ。
「ああ。爆弾で粉々になってもらった」
俺の回答にタイガーウォンが暫く黙る。
残念ながらこの世では魔族やモンスターだけが悪事を働くという訳ではない。悲しい事だが同じ人間同士で争うことも多い。
訴えられたら調査。
それが治安維持協会で定められている人殺しに関する法律だ。殺された者の遺族から訴えられた場合は、調査される事になっている。つまり殺した相手が本当の悪人なら、遺族から訴えられる事もないだろうというのが前提となっている。
「まぁ、ノニオーイの遺族から訴えられる事なんて無いだろう。実は奴は俺がトドメを刺したかったんだがなぁ」
タイガーウォンはそう言うと唇を舐めた。治安維持協会の支部長とは思えない程の悪の仕草が似合っている。
「それでは、それぞれ名前を言ってもらおうか」
タイガーウォンが偉そうに続けた。
近くの箱から葉巻きを取り出して火を点ける。俺は露骨に嫌な顔をしたが、タイガーウォンは一向に気にする素振りも見せない。
「レッド・ツイスター、リーダーのカリューだ！」

まずはカリューが元気良く答えた。
「お前らがレッド・ツイスターか！　色々噂は聞いているぞ」
タイガーウォンは俺達の正体を知っても、一向に態度を変える気はないようだ。
「さすがレッド・ツイスターと言ったところか。ノニオーイ海賊団を壊滅させたのも頷けるな」
「次はワシですな。聖騎士のジェットですじゃ」
礼儀正しくジェットが会釈する。
「ジェット？　レッド・ツイスターにそんな奴いたか？」
タイガーウォンが怪しむような眼でジェットを睨みつける。まるでボケてしまった老人を見るような眼だ。こいつ失礼にも程があるぞ。
「ジェットは私達がレッド・ツイスターと呼ばれるようになった後にパーティーに加わったんです。大事な仲間です」
落ち込んでしまったジェットに変わって秋留が答える。秋留もタイガーウォンの対応に嫌気がさしたらしく、若干語尾が強くなっている。
タイガーウォンは黙って秋留を凝視した。その眼が秋留の頭のてっぺんからつま先までを、舐めるようにいやらしく見つめる。
俺は我慢出来なくなり思わず立ち上がった。こいつの顔を一発ぶんなぐってやる！
その時、俺の横を真っ赤な刃物が通り過ぎた。
盗賊としての動体視力と反射神経が無ければ、タイガーウォンは串刺しになっていたかもしれない。俺は咄嗟にブラドーの刃を右手で掴んでいだ。
ブラドーもタイガーウォンに対して敵意を抱いたようだ。
「がっはっは。さすがはレッド・ツイスター。一癖も二癖もあるような連中が集まってるな」
一番癖があるのはてめえだ、と心の中で叫んだ。
「失礼しました。私は幻想士の秋留です。背中のマントはブラッド

マントのブラドーです」
秋留の紹介に背中のマントが鋭い牙になって構えた。ブラドーなりの威嚇に違いない。
「ふむ。そっちの黒いのは？」
黒いの、とはどうやら俺の事らしい。
確かに俺は上下をおそろいの黒いスーツで身を包んでいるが……。隣で秋留が小さく笑ったのが聞こえた。
「盗賊のブレイブだ」
不機嫌さを全面にアピールしていったつもりだったが、タイガーウォンには全く伝わってはいないだろう。
「ふむふむ…」
先程からタイガーウォンは手元のファイルをめくっている。どうやら俺達の身元の確認をしているようだ。
「あ～ん？」
胡散臭そうにタイガーウォンがカリューを睨み付ける。
「戦士カリュー？　獣人で登録されてはいないな！」
まるで不正を見つけたかのようにタイガーウォンが言った。
「話せば長くなるのだが、俺は戦士……カリューだ」
色々否定したい事があるらしくカリューは急に弱気になった。どれも説明しづらい事この上ないだろう。
まず元人間であること、そして自称勇者であること……。
それから三十分程タイガーウォンに俺達の冒険の話を聞かせた。
最初は胡散臭そうに聞いていたタイガーウォンも次第に楽しそうに眼を輝かせ始めた。
話しているのが聞きやすい秋留だからだろうか。秋留が幻想士として魔術を織り交ぜたりしているためだろうか。
「よしっ！　分かった。さすがに報奨金が大きいだけに色々聞いてスマンかったな」
スマン、という態度を全く見せずにタイガーウォンが続ける。
「この鞄に五千万カリム入っている」

ご、五千万……。俺は思わず生唾を飲み込んだ。
「ここら辺の航路を使う商船等が主に襲われていたからな。商人達からの寄付も大分含まれている」
俺達はそれから他愛無い話を済ませると、大金の入った鞄を持って治安維持協会を後にした。
とりあえず、この金を使ってデズリーアイランドで久しぶりのバカンスを楽しもう！

第一章　バカンス

広いベッド。全身を包みこむような柔らかさ。
今までは船の中の狭くて硬いベッドで寝かされていたからなぁ。
俺達はこのデズリーアイランドで一番高いホテル、デズリービューホテルに泊まる事にした。一泊二十万カリムもする。
あの後、一緒に船に乗ってきた商人達と報奨金を山分けし、俺の手元には八百万カリムが転がり込んで来た。金って素晴らしいな～。
俺は金にならない事はやらない主義だ。
そして金は貯めるものではなくて使うもの。それが俺のモットーだが、今までの数々の冒険で実は銀行には沢山のカリムが貯金されてたりしている。
俺は久しぶりに普段着に着替えた。青いTシャツにジーンズ生地のハーフパンツ、そして黒いサンダル。こんな小さな島では襲われる事もないだろうと思い、腰に黒い短剣一本を装備して二丁の愛銃ネカーとネマーは枕元に置いた。
部屋を出ると、丁度隣の部屋から秋留も準備を終えて出てきたところだった。ナイスタイミングだ、と自分を褒める。決して盗賊の五感をフルに活用して秋留が出てくるタイミングを窺っていたわけではない。
「あれ？　奇遇だなぁ」
「わっざとらし～」
少し嬉しそうな顔をして秋留が言った。嬉しそう？　そう思ったのは気のせいだろうか？　今の秋留はいつもの無表情に戻っている。
「一緒に飯でも食いにいかないか？」
俺はさりげなく誘った。
「何か誘い方もうまくなったよね」
あはは。変なところを褒められたなぁ。
「いいよ。どうせカリューとジェットは飲み屋でしょ」

確かにカリューとジェットは酒がお互い好きだが、俺と秋留はあまり飲まない。これは幸運と言える。
ちなみに秋留も普段着だ。
秋らしく黄色のカーディガンと茶色のスカートを着こなしている。白い髪飾りで髪をアップにしていて魅惑的な首筋があらわになっていた。
「ブラドー装備してくれれば良かったかな」
「いやいや、そんなの必要ないよ。何かあったら俺が守ってやるから」
「ブレイブが一番危険なんじゃんか〜！」
俺達は二人して笑った。
幸せだ。
まるで恋人同士のようだ。
気付いたら秋留はスタスタとホテルの下り階段へと降りていた。
「うっわ〜。海が真っ赤だよ」
階段の踊り場にあった大きな窓から外の景色が見えた。夕焼けで海が真っ赤に輝いている。
「綺麗だな……」
反射した光が秋留の顔を赤く染める。綺麗だよ……。
「ぐ〜」
腹が鳴った。雰囲気ぶち壊しだ。
「あはは。早く食べに行こうよ」

チェンバー大陸との航路で海賊が出現していたためだろうか。人が若干少なく感じるが、ホテルの外はそれなりに賑わっていた。海賊もいなくなったことだし、これからは客足も伸びるに違いない。
「魚料理以外が食べたいな」
「そうだな」
魚料理は船上で食べ飽きた。
俺達は美味しい匂いに釣られて焼肉屋にやってきた。

さすがに店内は空いていた。
何しろ観光客達は海の幸を食べに来ているようなものだから。
「お～い！　こっちこっち！」
遠くからカリューが呼んでいる。
何てこった！
俺とした事がつい匂いに釣られて、店内の様子を観察するのを忘れていた。
「やっぱり魚は食べ飽きたよね～」
秋留は嬉しそうにカリューとジェットのいるテーブルに座った。
「俺もまだまだだな」
俺はボソリと言うと同じテーブル席に腰を下ろした。
「ビール一つ」
「お？　珍しいな。ブレイブがビールとは……」
「ま、たまにはな」
カリューが嬉しそうに俺を見つめる。気持ち悪いから止めてくれ。
「じゃあ私もカシスオレンジにしようかな」
俺は店員を呼ぶと飲み物を注文した。
カリューとジェットは既に酒を飲んでいたが、改めて乾杯する事になった。
「リーダー、乾杯の挨拶！」
秋留が言った。
久しぶりの大地と久しぶりの休みに、秋留のテンションも高くなっているようだ。
カリューが黙って立ち上がった。
「え～、激しい船旅を乗り切ったレッド・ツイスターに……乾杯！」
『かんぱ～い！』
その後、焼肉食べ放題という事もあり、俺達はたらふく食べた。
会計はリーダーのカリューが払った。これだから金に頓着がない奴は扱い安くて便利だ。

「ふう」
ホテルの自室に帰ってきた俺は、一杯になった腹をさすりながらベットに横になった。部屋の荷物は無事のようだ。誰かが勝手にいじると罠が作動するようにしておいたが、何の異常もない。
風呂に入って寝るか。
俺は久しぶりの清潔な湯船に身体を沈めた。船の風呂は汚くて最悪だったからな。
風呂を出ると俺は寝巻きに着替えてベットへと身体を沈めた。

部屋のドアを軽快に叩く音で起こされた。壁の時計は十時を指している。
寝ぼけ眼でドアを開けると、秋留が外に立っていた。
「泳ぎに行くよ、ブレイブ！」
「遅いぞ！　早く支度しろ！」
「老人より起きるのが遅いとは何事ですかな？」
男二人はほっといて、秋留の台詞に一気に眼が覚めた。
「すぐ行く」
俺はドアを再び閉めると即行で支度を始めた。
「お待たせ！」
俺は勢い良く外に飛び出した。
奴らはまだ階段を下りようとしているところだった。
「はやっ！　エロエロパワー全開だね」
俺は走って秋留達に追いついた。
今日は念願の海だ。そして秋留の水着姿が見れる！

波が軽やかに音楽を奏でている。船上で聞いていた時とは全く違う気がするのは、気持ちの問題か。
更衣室で着替えて来た。俺はトランクスタイプの水着を着ている。さすがにブーメランタイプはヤバイだろう。カリューも同じくトランクスタイプ。ただし獣人のため、全身毛だらけだ。ジェットは全

身を覆うタイプの水着を着て老人らしさをアピールしている。
「秋留はまだか。んじゃあ先に泳いでくるかな」
カリューはそう言うと、海に向かって四本足で走り出した。
「邪魔しちゃいかんよのぉ。ワシも行きますかな」
ジェットも意味深な台詞を残して海に向かって歩き始める。
これで邪魔者はいなくなった。
いよいよ女神とご対面だ。
「きゃはははは」
遠くで若い女の笑い声が聞こえるが、全く興味がない。秋留はまだか。俺は女更衣室の出口を凝視し続けた。
「きゃはははは」
なおも女性の黄色い笑い声が聞こえてくる。
「チャリーン」
俺は思わず海の方に視線を送った。
「お金落としたわよ」
「ああ、スマンスマン」
若い男女が話している。俺とした事が思わず金の落ちる音に反応してしまった。
「あっれ～？　カリューもジェットも先に行っちゃったんだ～」
俺は思わず振り向いた。
そこには薄い布を身にまとった天女が…。
「ブレイブも砂浜を歩く女性を眺めていたしねぇ。私の事なんか皆ほったらかしだよね～」
秋留が口を尖らせる。
秋留は真っ白のビキニを着ていた。腰には布を巻いている。パレオという奴だろうか？　その布邪魔だな～！
更に観察するとビキニの左胸の所に、同じく白で薔薇の模様が刺繍されていた。
「良かったね～、ブレイブ。若い女の子の水着姿が沢山見れて」
俺が見たいのは秋留の水着姿だけだ。俺は秋留の水着姿を網膜に

焼き付けた。
「さて、私も泳ぎに行こうかな」
「あ！　置いていくなよ！」
俺は秋留の後を追いかける。引き締まった秋留の後ろ姿……最高だ。ありがとう！　って誰に感謝しているんだ、俺は……。
「やっと来やがったか！」
カリューが犬かきをしながら言った。やたらと様になっている。
隣では秋留も犬かきをし始めた。前も犬かきしてたなぁ。何でだろう。得意なのかな？
「ビーチボール借りてきましたぞ」
『ナイス！』
俺達は同時に叫んだ。自然と笑いが漏れた。
「ブレイブシュート！」
思いっきりビーチボールを叩いて、カリューの顔面にぶつける。
「やりやがったなぁ！　カリュークラッシュ！」
ぱんっ！
カリューの一撃であっけなくビーチボールが破裂した。確かにクラッシュだ。
「皆さん、スイカ割りの準備が出来ましたぞ」
さっきからジェットは遊びの準備が的確だ。まるで俺達の執事のようだ。
「よしっ！　俺に任せろ！」
カリューが棒切れを持った。その持ち方が達人の雰囲気を漂わせている。秋留が後ろからカリューの眼を白い布で覆い隠した。
「その場で十回転ですぞ」
ジェットの説明の通り、カリューがその場で十回転する。
『い～ち、に～、さ～ん』
いつの間にかギャラリーが増えている。中には一緒の船に乗っていた商人夫婦の姿まで見える。
『じゅう！』

カリューがピタッと止まった。その身体からオーラを感じる。棒切れがまるで鋭い刃物になってしまったかのようだ。その場の観客達も一斉に静かになった。
カリューが棒切れを構えた。
そして勢い良く飛び出した。俺の方に！
「あほ～！　こっちじゃねえ！」
「むう！」
俺は咄嗟に棒切れを両手で押さえた。その棒切れにカリューは更に力を込める。
「しぶといスイカだ」
「あほー！　俺だ！　ブレイブだ！」
『あっはっはっはっは……』
周りから笑い声が上がった。それでもカリューは手に持った棒切れの力を緩めない。こいつ、俺が砂浜でネカーとネマーをぶっ放した時の仕返しをしてるつもりか？
「そのまま俺を後方に放れ」
カリューが顔を近づけて囁いた。俺は黙って両手に力を込めた。今のところ俺は何も感じないが、カリューの野生の勘は何かを捉えたのだろう。
俺は思いっきりカリューを後ろに放り投げた。同時にカリューも自分で飛び上がる。後方は海だ。
俺は宙を舞うカリューを眼で追った。
カリューは棒切れを構えて力を貯めている。その身体が水に達する直前にカリューが棒切れを振った。
棒切れの一撃に海中から現れた何かが宙を舞った。人間二人分はあるような大きなサメが砂浜に打ち上げられた。サメはそのまま息を引き取ったようだ。
『おおおおお！』
周囲の人々から歓声が上がった。
さすがカリュー。

目隠ししていても凶悪なオーラを発している奴には気付くようだ。相手がスイカじゃあ気付かないかぁ。
それにしても、この巨大なサメ……。カリューがぶっ倒してなければ危険だったんじゃないのか？
「次は俺がやろう」
俺はカリューから棒切れを受け取った。
「よいしょっと」
秋留が俺の眼を白い布で覆う。俺はその場で十回転し始めた。俺の平行感覚と空間の把握能力を舐めるなよ。
ここだ！
俺は十回転して立ち止まった。
周りからは歓声が聞こえる。
匂いだ。
スイカの匂いを感じるんだ。
丸いスイカを想像して……。俺は数歩前に歩いた。俺の歩みには迷いは無い。
大きく棒切れを掲げて勢い良く振り下ろす。
周囲の観光客達から歓声が上がった。
俺は目隠しを取ると、半分になったスイカを掲げて秋留にアピールした。
「さっすが」
秋留はにっこりと微笑んだ。

「食事にしましょう」
俺達がビニールシートの上でスイカを食べていると、ジェットが焼きそばやらフランクフルトを持ってやってきた。美味そうな匂いがする。
「気が利くな、ジェット」
カリューが焼きそばの皿を受け取って言った。そして、あっという間に食べ終えてしまった。最近のカリューはやたらと食欲がある。

「はぁ～、こんなにゆっくりするのは久しぶりだよね」
秋留がジェットが持って来たかき氷を食べている。俺もジューシーなフランクフルトを食べているところだ。マスタードが唇について辛い。
「船は、あと四日くらいで修理が完了するそうですぞ」
それじゃあ、それまではこのデズリーアイランドでゆっくり出来るという事か。毎日秋留の水着姿を見れると幸せなんだけどなぁ。今も目の前の秋留は水着姿だ。肩にかけたタオルが邪魔だが。
「さてっ！　昼飯も食べたし、また遊ぶか！」
「次は何かないの？」
毎回何かを用意して待ってくれているジェットに向かって、秋留が期待を込めて聞いた。
「ふぉっふぉっふぉ」
急に怪しげな老人の様に笑い始めるジェット。いや、元々怪しい老人だった。
「この浜辺の端……」
ジェットが指さした方向に俺達は顔を向ける。
「両方の親に反対された若いカップルが身投げした崖があるらしいのじゃが……」
ジェットの色の悪い顔で言われるとやたらと迫力がある。
「昼間でも出るらしいのですじゃ……」
ごくり。
俺達は唾を飲み込んだ。
「行きますかな？」
まるで地獄の案内人だ。ジェットがやるとリアリティがある。
俺達はジェットの後をついて歩き始めた。
まだまだ日は高いが、こんな時間から幽霊なんて出るのだろうか？
ちなみに戦闘で戦う亡霊や骸骨系の敵と違って、何で人間の幽霊には恐怖してしまうのか不思議でしょうがない。身体中にジンワリと汗をかき始めた。

「い、いや……やばそうだけど」
普段は落ち着いている秋留の言葉が詰まる。
俺達の前方に見えてきた崖は、周りが鬱蒼とした林に包まれていた。昼間だというのになぜか全体に黒いモヤがかかっている。一気に周りの気温が下がったように感じられた。
「何だ、普通の崖だな」
鈍感カリューが言った。
どこをどう見たら普通なのか。崖を構成する岩の一つ一つが顔のようにも見えるこの景色を、普通と申すとは何事だ……。
「そうだな、どうって事なさそうだな」
誰だ？　そんな事いう奴は。
俺はキョロキョロと辺りを見渡そうとしたが、なぜか身体が動かない。
「へ～、やけに勇気ある発言じゃん」
秋留が関心したように俺に言った。
うん？
俺、何か言ったっけ？
「さぁ、行こう！」
俺だ。
俺の口から勝手に言葉が出て来る。
俺の身体が崖を囲む林目指して歩き始めた。一体どうなっているんだ。
秋留に目線を送ろうとしたが、全く言う事をきかない。
俺の目線は一直線に崖を見つめている。
足元の草を掻き分けて、俺の脚が勝手に崖を目指して突き進んだ。
「待ってよ～」
秋留が何とか俺について来る。
俺の隣ではカリューが辺りをキョロキョロしながら歩いていた。
ジェットは俺の視界には入らないが、足音からすると普通について来ているようだ。

「ここから上れるぞ」
俺の身体は勝手に急な上り坂を登り始めた。
「あと少しだね」
秋留が言った。辺りには濃い霧が立ち込めている。いつの間にかカリューとジェットの姿が見えないが、どこに行ってしまったのだろうか。
せっかくの二人きりだと言うのに、自分の身体が全く言う事をきかない事が悲しい。
「やっと解放されるのね、私達」
秋留が言った。
どういう事だろう？
気付くと目の前に崖の端が見えていた。その向こう側には何もない。ここが若いカップルが命を落とした場所だろうか。
やばい。
やっと事の重大さに気付いた。
どうやら俺の身体は命を落とした若い男の幽霊に乗っ取られているようだ。
駄目だ。
このままだと秋留を巻き込んで投身自殺しかねない。
俺は必死に抵抗しようとしたが、全く身体が言う事をきかない。
俺の手が秋留の左手を握った。
そして首が勝手に動いて秋留を見つめる。
ああ、これがリアルなら昇天ものの幸せなのに、このままだと本当に昇天しかねない。
「行こう」
秋留が言った。
まさか！
秋留も乗っ取られている？
駄目だ！
このままじゃ本当に俺達は……。

ちくしょう！
ジェット！
お前、自分の仲間を増やすために、俺達をこんな危険な場所に案内しやがったな！
このままじゃ俺達パーティーは三人がゾンビで、一人が獣人という最悪パーティーとなってしまう。
と言うか、秋留が死んでしまったら、ゾンビとして復活する事もなさそうだ。
俺と秋留は崖の寸前まで足を踏み入れた。
「かあああああっつ！」
その時、どこかのオッサンの叫び声と一緒に力強い鈴の音が鳴り響いた。
俺と秋留の身体は同時にビクンッと揺れ、その場に座り込んだ。
無理な抵抗をしていたせいで、身体中が痛い。
「危ないところでしたな」
疲れた眼で声の主に振り向く。
全身を白い法衣に身を包んだツルッパゲの爺さんだ。右手には杖を持っている。
その爺さんに連れられて俺達は危険な崖から引き戻された。

いつの間にか大分日が落ちていた。
ここは崖近くの祠だ。
目の前には先程のツルツル爺さんが座っている。
「すまんですじゃ。はぐれて気付いた時には秋留殿とブレイブ殿が崖の上に仲良く立っているのが見えて……」
「その時、祠からこの爺さんが慌てて走り出て来たんだ」
ジェットとカリューが説明している。
半分放心状態の俺と秋留は黙って話を聞いているしかなかった。
「ゲーンと申します。この祠で浮かばれない霊の世話をしています」
ゲーンと名乗った老人が礼儀正しくお辞儀をした。

「この崖には心中した若いカップルの霊がいるんです。祓っても祓っても舞い戻ってきて二人で住み着くんです」
一呼吸置いて、更に続ける。
「そして、同じ様に愛し合っているカップルを見つけては、取り憑いて崖から身投げをする」
ゲーンは後ろを振り返って、壁際に並ぶ蝋燭を見つめた。
「貴方方が危うく二十組目のカップルになるところでした」
ゲーンが言った。
カップルか。
爺さんも良い事を言う。隣の秋留に目線を送ると、白い眼で見つめ返された。
「私がネクロマンサーだった事もあるから……。多分それで取り憑かれたんだと思う」
秋留が言った。
ちくしょう。そんな事だろうとは思っていたけど、いちいち説明しなくても……。
「ブレイブは運が悪かったんじゃない？」
いや。
違うぞ、秋留。俺は少なくとも秋留の事が大好きだ。愛している。と口に出せれば楽なのに。
「何はともあれ、もうあの崖には近づかん事じゃ」

祠からホテルへと帰る散歩道。俺達は無言で歩き続けていた。
疲れた。モンスターや魔族との戦闘以外で死を覚悟したのは、これが初めての経験だった。
幽霊タイプのモンスターなら、取り憑かれてもすぐに追い出す自信はある。
しかし今日は全く身体が言う事をきかなかった。
それ程に愛という力、そしてその想いは強烈なものなのか。
「詩人だね～」

秋留が隣で言った。
いや、俺の心の中の哲学まで読まないでくれ。
「ど、どうでしたかな？　聖騎士ジェットのワクワク心霊体験は？」
俺と秋留は同時にジェットの頭を叩いた。
身近な心霊現象はジェットの存在だけで十分だ。

身体が重い。昨日無理をしたせいだろう。
せっかくの休養なのに逆に疲れてしまった。それは他のメンバーも一緒らしく、今日は昼前だと言うのに誰も声をかけてこない。
俺は布団から出ると熱いシャワーを浴びた。幾分か頭がスッキリとした。
今日は黒いシャツに黒いズボンという格好だ。俺は食事を取るためにホテルのレストランへと歩いて行った。
「おはよ」
「遅いですぞ」
「頭腐んぞ」
どうやら俺が一番最後だったようだ。
俺は空き席が丁度秋留の隣だったので機嫌良く腰を下ろした。
「昨日は散々だったな」
「そうだね。昨夜は身体が痛くてなかなか寝れなかったよ」
秋留も大変だったようだ。
隣ではジェットが申し訳無さそうに頭を掻いている。
「皆さん！　お詫びと言っては何ですが、このホテルの裏山にある立派な滝でも見に行きませんかな？」
ジェットは昨日から色々と手際が良い。
こういった旅行のような計画を立てるのが好きなのかもしれない。
「幽霊とか亡霊とかゾンビとか出ないだろうな？」
俺は念を押した。
「そんなものこの世にはおりませんぞ。ふぁっふぁっふぁ」

ゾンビのジェットが豪快に笑った。

ホテルの裏山の滝は、歩いて三十分程の場所にあった。
見渡す限りに細い滝が崖の上の方から流れてきている。
「サウザント・ウォーターフォールという名前らしいですぞ」
ジェットが近くの案内板を見て説明している。
ジェットが色々な伝説を喋っているが、俺は聞いていなかった。
周りに変な気配がする。俺は黙って銃を構えようとした。
「あ……」
うっかり銃を装備してくるのを忘れていたようだ。
腰の短剣すら無い。
「おい、皆気をつけろ……」
俺は静かな声で言った。黙って足元の手頃な大きさの石を数個取り上げる。俺が投げれば、それなりの凶器にする事が出来る。
「あ！　武器持って来てねえ」
カリューが言った。
いや、お前は自慢の牙と爪でどうにでもなるだろう。
「私は簡単な呪文なら唱えられるよ」
秋留も武器となる様な杖を持ってきてはいないようだ。杖には魔法力を高める効果もあるらしく、杖を構えていないと使えない魔法があるらしい。
「ワシは持ってきてますぞ」
ジェットは秋留のお下がりのマジックレイピアを鞘から抜き出し構えた。
「隠れてろ！」
俺は近くの売店い居たオバちゃんに叫んだ。
俺達の真剣な雰囲気に、オバちゃんは店の扉を全て閉めて奥に引っ込んだ。
べちゃ、べちゃ……。
べちゃ、べちゃ……。

水系モンスターと思われる足音が聞こえてくる。一匹だけではないようだ。
『正面だ！』
俺と同時にカリューも叫んだ。こいつ獣人になった影響でやたらと勘が鋭くなったようだ。
俺は手に持っていた小石を勢い良く投げつけた。
ドゴンッ
小石が人間大はある巨大な水の塊により吹き飛んだ。
巨大水鉄砲を放ったモンスターが滝の裏側の林から出来てきた。全身水色をした半魚人のように見える。
「あれ？　確かラムズが操っていたモンスターと同じタイプだよ」
秋留が言った。
「炎の精霊イフリートよ、炎の弾丸で敵を撃ち抜け！　ファイヤーバレット！」
秋留の放った炎の弾丸が半魚人目指して突き進む。
魔法が当たりモンスターが燃え上が……らない！　いつもなら秋留の魔法を食らったモンスターは燃え上がるのだが、目の前の半魚人は何のダメージも受けていないように見える。
「やっぱり！　ラムズが操っていた半魚人も身体を覆うヌメヌメした鱗で炎を弾いちゃったんだよ」
「ではワシが……」
ジェットがマジックレイピアを構えた。
マジックレイピアは、魔力を込める事によって威力を増大させる事が出来る貴重な武器だ。売ったらきっと高いに違いない。ちなみにジェットは聖騎士のため、ある程度の魔力は込める事が出来る。
「はっ！」
ジェットの突きが半魚人モンスターの腹部を突き刺した。と同時にマジックレイピアに込めた魔力が爆発して半魚人モンスターを粉々にした。
俺達の目の前にいた半魚人モンスターの残り二体は、俺と秋留に

襲い掛かってきた。
「ガルルー」
半魚人の叫び声ではない。カリューの野生の雄叫びと共に、俺達に襲い掛かってきた半魚人二匹の首がえぐり取られた。カリューの両手の鋭い爪には半魚人達の肉片が握られている。
「久しぶりに地上での戦闘だったが……やっぱりきちんと踏ん張れて良いなぁ」
カリューが悪人のように微笑んでいる。お前には武器は必要ないよ。
「この辺りにはよく出現するモンスターなのかのぉ？」
「小さい島だからね。海系のモンスターも多く出現するんじゃない？」
ジェットと秋留が話している。
俺は近くに他のモンスターの気配がないか観察したが、どうやらモンスターはコイツらだけのようだ。
それでも何か嫌な予感がする。
俺達の短いバカンスも終わりそうな、そんな嫌な予感が。そもそも冒険者にとって休息なんて物はないのかもしれない。

第二章　獣

「おかえりなさいませ。どうでした？　サウザント・ウォーターフォール、綺麗でしたでしょう？」
デズリービューホテルの入り口では、眼鏡をかけた真面目そうな支配人が待ち構えていた。
「出迎えが派手だったな」
「ああ、売店のおばちゃんですか？　あの人はサウザント・ウォーターフォールの裏の名物でして……」
尚も話続けようとする支配人を放っておいて俺達は自分達の部屋に戻っていった。
「ブレイブの部屋はそっち！」
さり気なく秋留の部屋に入ろうとしたが、見事に断られた。
俺は仕方なく自分の部屋へと戻った。部屋の時計は十六時を指している。もうそろそろ夕飯だな。
俺は今度は二丁の拳銃を装備して食事へと出掛ける事にした。装備も普段着からそれなりのものへと変えている。
外へ出ると秋留が隣に……いない。そうそう上手く行くはずもないか。俺は秋留の部屋の扉をノックした。
「今日はルームサービスで済ませるから」
寂しい返事が来た。
仕方なくカリューとジェットの部屋をノックしてみたが返事がない。二人でどこかに飲みに行ったのかもしれない。
今日も夕日が綺麗だ。
ホテルから暫く歩いた場所にある飲食街は沢山の人で賑わっている。昨日よりは人が多いようだ。
俺は灯りに群がる虫のように、一軒の焼き鳥屋の提灯に引き寄せられていった。
「らっしゃい！」

威勢の良い店屋のオヤジが言った。店内は十人程が腰を掛けられる長さのカウンターがあるだけだ。オヤジ以外の店員はいない。
「お？　ブレイブじゃないか！　一緒に飲もうや！」
何てこった。
カリューやジェットと一緒に食事をするならまだしも、俺の目の前にはタイガーウォンが手招きしているのが見える。派手なアロハシャツに青っぽい短パンを履いている。治安維持協会の部屋では嫌気が差して観察をあまりしなかったが、治安維持協会にいる時もこの格好だった。
それにしても、こいつは見れば見るほど悪人面をしている。
まず眼に付くのはトゲトゲとした真っ黒な口ひげ。
そして顔を斜めに横断する真っ赤な傷跡……。
「オヤジ！　生ビール一本追加な！」
タイガーウォンが飲み物を注文した。俺は今日はビールを飲みたい気分ではないのだが、こいつはトコトン自分勝手な性格なようだ。
俺は目の前のメニューを見た。鶏つくねが美味そうだ。
「この店はな、つくねが美味いんだよ」
う……。
まるでタイガーウォンに言われて注文したようになってしまう。それならそうと、飲み物同様に俺の分まで注文してくれれば良いものを……
「はいよ！　生ビール！」
タイガーウォンがデカいジョッキを受け取ると、一気に半分程を飲みつくした。
こいつ、俺のためにビールを頼んだんじゃなかったのか！
俺は仕方なく自分でビールを頼んだ。
コーラなどのジュース類を頼んだら、タイガーウォンに馬鹿にされそうな気がしたからだ。
「あと、つくねとネギマ……」
敗北感を味わったが、つくねはどうしても食べたい。

「あんたら、この島には何しに来たんだ？」
このオッサンと余り関わりたくない気持ちを我慢して、俺は適当に話し始めた。
「カリューの呪いを解きにアステカ大陸まで向かっているところだ」
そう。
カリューは数々の不幸が重なって獣人街道まっしぐらとなってしまった。元々の原因は俺にあったのかもしれないということは勿論言わない。
治安維持協会ではカリューが獣人化したところまでしか話してなかったから、秋留の続きを説明しなくてはいけないと思うと気が重い。
それからたっぷり一時間程付き合わされた。

外はまだ少し明るい。
今夜は満月のようだ。
それなのに隣を歩いているのがタイガーウォンだという事が悲しくて、同時に怒りがこみ上げてくる。俺はタイガーウォンに言われるがままに町の見回りを手伝っている。なぜなら焼き鳥屋の代金はタイガーウォンの奢りだったからだ。
普段なら何の感謝もしないところなのだが、こいつに借りは作りたくなかった。だから仕方なく見回りに付き合ってやっている。
「やはり強い冒険者が近くにいると落ち着くなぁ！　がっはっはっ！」
少し酒に酔っているらしく声もデカイしロレツも回っていない。
治安維持協会はまずタイガーウォンを取り締まるべきだ。
その時、俺は女性の甲高い悲鳴を聞いた。
勿論、聴力が常人の十倍はあると自負している俺の耳だからこそ聞き取れたのだ。
「おい！　女性の悲鳴だ！」
俺は隣をご機嫌にフラフラと歩くタイガーウォンに言った。

タイガーウォンは全く聞こえていないらしく辺りをキョロキョロとし始めたが、顔は浮かれ顔から凶悪そうな引き締まった顔になっている。
「案内しろ！」
タイガーウォンが叫ぶ前に俺は既に走り始めていた。せっかくのバカンスが台無しだ、全く……。
「真っ直ぐ走り続けろ！」
俺より明らかに出遅れているタイガーウォンに向かって叫んだ。タイガーウォンが後方で小さく答える。
辺りは薄暗いが俺の眼には何の問題もない。
両手に持ったネカーとネマーを握りなおして近くの林を抜けた。目の前は険しい崖になっていて、右前方に向こう岸に渡るための吊橋がかけられている。
「助けて～！」
橋の向こう側でモンスターから逃げ惑う黄色の髪をした少女の姿が見える。
モンスターは頭に小さなサクランボのような果物を付けた通称、桜ワニだ。こいつはデカイ図体の割りには素早い。急がないと少女はあっという間にミンチにされてしまうだろう。
ズダダンッ。
ネカーとネマーから発射された硬貨が桜ワニの頭を吹き飛ばした。
俺は急いで吊橋を渡ると少女の前に走った。
「バカァッ！」
なぜか目の前の少女は俺を睨みつけて叫んでいる。
俺が不思議そうな顔をしていると、抜けていた腰を抑えながら俺の前に立ち上がった。身長は低くて頭が俺の腹の位置にある。
「何でもっと早く助けに来ないのよ！」
俺は思わず立ち去ろうとした。
その時、別のモンスターの気配を感じて目の前の少女の腕を引っ張る。

少女のいた地面が水の塊によってえぐれた。
べちゃべちゃ……。
つい最近も聞いた水系モンスターの足音。
林の中から出てきたのは水色の鱗で全身を覆う半魚人モンスターだ。半魚人モンスターが一、二……五匹か。
俺はネカーとネマーを構え……られない。
俺の身体にしがみつく少女が両腕もろとも押さえつけていて、とっさに腕が上がらない。
「いやぁあああああ！　気持ち悪い！　ヌメヌメ！」
「その手を離せ！」
半魚人モンスター達の口が俺と少女に狙いをつける。まるで銃口を突きつけられているようだ。五匹のモンスターがまるで何かに操られているように一斉に息を吸い込む。
俺は仕方なく少女を抱えたままその場を離れた。
地面が次々に弾け飛ぶ。
「あ～ん。お姫様抱っこされちゃった～」
俺はその場に少女を下ろす。少し高い場所から。
「いった～い！」
両手が自由になった俺はネカーとネマーを連射した。
三匹の半魚人の身体がその場に崩れ落ちる。
しかしその姿を見ても残りの二体の半魚人は全く怯まない。
敵二体を誘き寄せるようにその場を走り出す。
びゅるる！
俺の脚に何かが巻きついた。
後方にはカラフルな八本の足をウネウネとさせているモンスター、虹タコが構えていた。
「きゃああ！」
半魚人モンスターの口が少女を捕らえる。
ぶんっ！
俺の身体が虹タコの足に掴まれながら宙を舞う。虹タコってこん

なにパワーがあったっけ？　と冷静に考えている場合ではない。
俺は宙を舞いながらも少女を狙う半魚人モンスターの頭を吹っ飛ばした。
「ぐはっ」
地面に思い切り叩きつけられた後、更に地面を転がる。やばい！
このまま転がると！
俺は思わず地面から飛び出している木の根っこを掴んだ。
すぐ後に崖から身体が飛び出した。
嫌な音を立てて俺が掴んだ根っこが地面から出てくる。
「どりゃあっ」
俺はいつも腰に装備している黒い短剣を崖に突き立てた。右手で根っこを押さえ左手で短剣を崖に突き立てているだけで、身体は宙を浮いている状態だ。
「ふしゅるるる～」
崖の上から虹タコが見下ろしている。その八本の手足が今にも攻撃してきそうだ。
俺は右手に持っていた根っこを離し、背中に装備している小さな鞄から機能的に収めているロープを取り出した。
そのロープを振り回して高みの見物をしている虹タコの身体に巻きつける。
つるりんっ。
何てこった。
虹タコのヌメヌメとした身体にロープを巻きつける事が出来ない。
「何やってやがる！」
反対岸からカリューの叫び声が聞こえた。よりにもよって嫌な場面を見られたもんだ。
「うおおおおおおん」
カリューの叫び声が俺の頭上をこだまする。
上を見上げるとカリューが見事な跳躍を見せているところだった。
この崖、対岸まで二十メートルはありそうなんだけどな……。

俺の見えない場所でモンスターがカリューの剣に切り裂かれる音が聞こえる。
暫くしてカリューが崖の上から手を差し出してきた。俺は持っていたロープを投げてカリューの手に巻きつける。
「ちっ。助かったよ」
「その『ちっ』っていうのは何だ？」
崖を登るとカリューが偉そうに俺の前に立ちはだかっていた。その隣にはタイガーウォンとジェットのオッサンコンビもいる。
更にその向こうに……。
「あんた、ほんっとうに情けないわね！」
さっきの生意気な少女だ。
俺はわざとシカトした。とりあえずこの場面を秋留に見られなかっただけ良しとしよう。
「丁度ここに向かっているところで、ご機嫌になっているカリューとジェットを見つけてな。念のため来てもらって正解だったようだ」
何かムカツク言い方でタイガーウォンが喋っている。この場に俺の味方はいないのか？　ジェットは大分酔っ払っているようだし。助け舟は期待出来ない。
その時、俺は首筋にゾクゾクする気配を感じた。まだ何かいる！
その気配はカリューの野生の勘も捕らえたようだ。
俺はネカーとネマーのトリガを引いた。だが乾いた音を発して硬貨が空しく辺りに散らばった。
「甲羅？」
俺の視界に一瞬映ったのは亀の甲羅のようなものだった。しかし今は何も見えない。
「随分出てきたじゃないか」
タイガーウォンが腕まくりをし始めた。このオッサン、戦うつもりか？
目の前には水系のモンスターがワラワラと出現し始めた。
「タイガーウォンさんとジェットはそこの少女を連れてここから逃

げるんだ！」
唯一頭が使えそうな俺が指示する。
酔っ払いのジェットも腕も足も短いタイガーウォンも生意気なだけの少女も、ただの足手まといだ。こういう時こそ隣のカリューは役に立つ。
「ホテルに泊まっている冒険者や治安維持協会員を探す！　それまで持ちこたえろ！」
タイガーウォンが少女を連れて走り去る。その後ろをジェットがフラフラとついて行った。ああやって見るとジェットもただの爺さんだな。
ちなみに『持ちこたえろ！』は間違っている。俺とカリューがいればこの程度の質と量のモンスターなら苦労する事なく蹴りがつくだろう。
「援護頼むぞ」
そう言うとカリューは右手で剣を構えて走り始めた。俺は両手にネカーとネマーを構える。
まずは左前方から来ている、今にも口から水大砲をぶっ放しそうな半魚人の頭を吹き飛ばす。
次は右奥から黒い銛を投げようとしていた金色の魚モンスターの身体に穴を開ける。ちなみに俺がモンスターを二匹葬っている間にカリューの剣は六匹のモンスターを薙ぎ倒していた。
まぁ、俺のネカーとネマーは命の次に大事な硬貨を打ち出す特別製だから、あまり無駄打ちは出来ない。
「うおおおおおん！」
カリューが再び叫ぶ。その叫びだけで普通のモンスターなら怯むのだが、この辺りに出現するモンスターは肝が座っているらしく全く怯まない。
俺は木の上から愚かにも俺を狙っていた魚モンスターを打ち落とした。
「カリュー、そろそろ終わりだな」

カリューの方を振り向いて言った。
剣を使って戦っていない。爪と牙でモンスターを切り裂いている。牙で戦っているっていう事は口を使っているという事で……。よく出来るな。そんな人間離れした事……。それにしても今日のカリューは正に獣だ。
そして最後の一匹のモンスターの喉仏に喰らいついた。
カリューが息の根が止まったモンスターを口にくわえたまま俺の方を振り向く。
その眼は最早、人間でも獣人のものでもなかった。
「おい、カリュー、大丈夫……」
俺が話し掛けようとした途端、カリューは口にくわえていたモンスターを放り投げると、四本足で俺に突進してきた。
まさか、ジャレるために向かってきているんじゃないだろうな？
カリューの鋭い爪が俺の右肩に食い込み激痛が走った。今の避けてなかったら確実に首をやられてたぞ！
「落ち着け！　カリュー！」
俺の制止もむなしく、カリューが再び飛び掛ってくる。
俺は両銃をホルスターに戻すとカリューの両手、いや、前足を両手で掴んだ。
「冗談だったら、今のうちに止めておけよ」
俺は静かに、そして迫力を込めて言った。
両前足を掴まれたカリューは、俺の顔の目の前でデカイ歯をガチガチと鳴らしている。唾が飛んできた。汚い。
俺はカリューの腹に蹴りを入れると、そのままカリューを後方に投げ飛ばした。
そして再びネカーとネマーを構えると、マガジンの中身を素早く入れ替える。ここまでの動作は常人の眼には映らないほど素早い。
ズダダッ！
振り向き様に両銃をぶっ放すが、あっさりとカリューに避けられた。

今、ネカーとネマーに入れられている硬貨は、殺傷能力の低い石で出来た硬貨だ。ちなみに今までは銅で出来た千カリムを使ってモンスターの頭を吹き飛ばしていた。この石の硬貨なら運が良ければ助かるだろう。いや、カリューの生命力と頑丈さから考えて、当ても気絶させる程度にする事が出来るはずだ。

「がるるる……」

まるで絶好の獲物を見つけたかのようにカリューが唸る。その口からはメインディッシュを目にしたかのように大量の涎が垂れてきている。

まさかカリューと戦う事になるとは。

悔しいが、カリューの強さは俺の比ではない。まともにやったらタダでは済まないだろう。

しかし、今のカリューなら話は別だ。

ただの獣と化したカリューなら勝てるに違いない。

「がうっ！」

カリューが飛び出した。

俺は右手のネマーのトリガを引く。

そしてカリューの避ける位置を予測して左手のネカーのトリガを引いた。

カリューはネマーの硬貨を左に避け、ネカーの硬貨を右前足で打ち落とした。

「馬鹿なっ！」

思わず叫んでしまった。

カリューの口が俺の左腕を捉える。

「うっ」

思わず声が漏れた。俺は右手で持ったネマーの照準をカリューの頭に向けた。

その動作を一瞬で察したカリューは俺から離れる。

俺は痛む左手をかばいながら体勢を立て直した。

こいつ、動きは正常のカリューの時のままだ。完璧に獣と化した

思考なら勝てると思っていたが、危険を察知する能力や、相手の状態を観察する能力は厄介にも変わっていない。
正常だったカリューより獣としての動きが混じった今の方が、予測もし難い。
「参ったな……」
思わず呟く。
そんな事はお構いなしにカリューが突っ込んでくる。闘牛士の様にカリューの攻撃をヒラリとかわした。……が、脇腹に鋭い痛みが走る。
カリューが爪についた俺の血と肉を舐めているのが見えた。
「変態野郎がぁ！」
俺はネカーとネマーを連射した。下手な鉄砲数打ちゃ当たる戦法ではない。全てカリューの避ける軌道を読んでトリガを引いた。
カリューは状態を低くして避け、低空で襲い掛かる硬貨を右に避ける。そして飛んできた硬貨を左手の鋭い爪で砕いた後は後方に一度ジャンプして硬貨をかわす……。
俺の放った硬貨が面白いようにかわされた。
しかし、そう全てを上手くいかせては情けない。
俺はカリューの避ける方向を予測して身体ごと体当たりを食らわせた。
硬貨の小ささなら避けられるかもしれないが、人間がそのまま突っ込んだら避けられまい。
「ガウウッ」
俺の左の肘打ちがカリューの眉間にクリーンヒットした。
そのまま右手の銃のトリガを引いて、硬貨をカリューの腹に六発叩き込む。
カリューが吹き飛んだ。俺はカリューとの距離をあけて息を整える。
まるで何もダメージを受けなかったかのようにカリューが地面を蹴って突進してきた。

「まだ早えよ！」
息を無理やり整えながらカリューの攻撃を避ける。俺の後ろにあった木の幹に鋭い爪跡が残った。目の前にあったカリューの腹に今度は膝蹴りを食らわす。
しかしカリューは吹き飛ぶ事なくそのまま俺の膝にしがみつき、太腿に食らいついてきた。全身に激痛が走る。
太腿にくっついたままのカリューの眉間に至近距離から銃をぶっ放した。鈍い音と共に野獣と化したカリューが崩れ落ちた。
今がチャンスだ。
俺はいつも腰に装備している小さな鞄からロープを取り出すと、手早くカリューを縛りつけた。まるで丸焼きにされる前の豚のように。
俺は力尽きて近くの木にもたれかかった。
服の下に装備している鋼鉄の肘あてと膝あてを確かめる。確かに装備しているよな……。それなのにカリューは全く怯まなかった。
眼が覚めたらカリューが正常に戻っている事を期待しながら、俺はそのまま気を失った。

翌日。
デズリーアイランド唯一の魔法病院には沢山の怪我人が収容されていた。
あれから、駆けつけた治安維持協会員達とタイガーウォンが状態を確認するためにカリューに近づいたところ、再びカリューが暴れたらしかった。ロープは鋭い牙で切り裂かれていたらしい。
十人がかりでカリューを抑え込んだらしいが、そのうち半分は多かれ少なかれ怪我を負わされた。
そんなカリューの所属するパーティーのメンバーである俺達は、治安維持協会の椅子に座らされていた。カリューのお陰で治安維持協会の椅子に座らされるのが初めてではないあたりが、更に情けなさを倍増させる。

「今まで手がつけられない程、暴れたことはないと……そういうことだな？」
タイガーウォンが手元のファイルを参照しながら聞いていた。ちなみにカリューを取り押さえるためにタイガーウォンも左腕にかすり傷を負ったらしい。
それにしても良くあそこまで暴走したカリューを押さえつけられたものだ……。
「無かったですね」
秋留が答えた。ちなみにカリューが徐々に凶暴化していたなどという不利になるような事は言わない。その辺はしっかりしている。
「まぁ、あんた達レッドツイスターには治安維持協会も魔族討伐組合も感謝はしているからな。そうそう酷い処分にはならんと思うが……」
タイガーウォンは大きく溜息をついた。
「カリューは何とかしてもらわんとイカン」
そりゃそうだ。
何とかなるなら何とかしたい。
俺達はそれから数え切れない程の釘を刺され、治安維持協会を後にした。

「私が部屋でスヤスヤ眠っている時に、色々大変だったみたいだね」
ここはホテルのロビーだ。
俺と秋留とジェットで緊急会議を開いている最中だ。
「首輪でもして連れて行くしか無さそうだよな」
「う～ん……。首輪ぐらいじゃ大人しくなりそうもないよね？」
俺と秋留は頻繁に意見を出し合う。
隣では最近活躍していないジェットが傍観者となっている。どうしたのだろう。
「あ？　ジェットの事が気になる？」
秋留が突然聞いてきた。

「私自身の魔力充電中だから、ジェットへの魔力も一時少なくしているの」
ジェットが秋留のネクロマンシーの力により操られているゾンビだという事を、改めて実感した。確かに今のジェットはいつもの顔色より更に白い。まるで死人のようだ……？
「で、ブレイブが午前中病院で治療を受けている間に、カリューの所に行って来たんだけど……」
秋留のその台詞に、若干嫉妬心を覚えた。
「幻想術とかでカリューを落ち着かせようとしたんだけど全く駄目。完璧にモンスターになっちゃったみたい」
秋留の術でも変わらないとはバチあたりな奴だ。さてどうしたものか。
その時、俺達の方に近づいてくる二つの足音が聞こえた。俺はホテルの入り口の方を向いていないため。誰が近づいてきているのか分からない。
俺と秋留の仲をジャマする人間の気配に、睨みつけるように振り返った。
「げっ」
思わず声が漏れる。
「あ〜！　あの時のヘボ冒険者！」
俺が森の中で助けた少女が俺の目の前に立っていた。全身ピンクのフリフリドレスを着ていて、あの時と変わらない生意気そうな面を俺に向けている。
「これ！　クリオネア！　この方達は有名な冒険者パーティーなんだぞ！」
隣にいた傲慢な顔をした豪華なオッサンが言った。
「違うもん！　この黒い奴はヘボいんだもん！」
その台詞に豪華なオッサンが生意気な少女の肩をガシッと掴んで自分の方を向かせた。そうだ、そうだ。怒ってやれ！
「これ、クリオネア……。いかに見た目がヘボくてもそれを口に出

してイカン。心の中で下民共を罵る程度にしておけ」
こいつら親子だな。
俺がうな垂れていると秋留が話しかけた。
「あの……どうかいたしましたか？」
秋留の優雅な喋り方に生意気親子はパッと顔を向けた。
「ああ、貴方があの有名なレッド・ツイスターのリーダー、カリューさんですか？　さすがに堂々としていて威厳が感じられますな」
豪華なオッサン暴走。ある程度は知識を仕入れてから話しかけて欲しいものだ。そもそもカリューって男の名前じゃないのか？
「私はレッド・ツイスターのメンバー秋留です。カリューは事情があって別行動を取っています」
さすがに治安維持協会に捕まっているとは言えない。
「ああ、貴方が亜細李亜大陸出身で、召喚魔法から黒魔術まで使える秋留さんですか？」
黒魔術？　万能な秋留も魔族の専売特許である黒魔術は使えない。どこまでも中途半端でガセな情報ばかり仕入れてきやがって……。
「え、ええ……」
さすがに突っ込む気も失せたのか、秋留が困りながら返事をした。
「実は相談があるのですが……。この愛娘に是非とも魔法を教えて頂きたい」
暫しの沈黙。
さすがの秋留も話の流れを予測出来なかったのか口をあんぐりと開けている。しかしそれもつかの間。秋留が気を取り直して話し始めた。
「私達が乗ってきた船もまだ出港しませんし、可愛いお嬢さんのお世話を出来るなら喜んで」
秋留はまるで天使のような笑顔で言ったが、俺は隣で悪魔のような笑みを浮かべていた。せっかくのバカンスを、どうしてこんなクソ生意気なガキの相手なんかしなくちゃいけないのか……。
俺の抗議の視線を感じたのか秋留が俺に目配せする。

その眼の意味を「後で説明するよ、大好きなブレイブ」と解釈した俺は、黙って成り行きを見守る事にした。
「そうですか！　さすがはレッド・ツイスター。世のため、人のためなら例え火の中、水の中ですな！」
ちゃんと分かっているじゃないか。目の前で俺を睨んでいる少女にものを教える事は、業火の中に素っ裸で突っ込むようなものだと……。
「いつでもよろしいです。時間の空いている時間に我が屋敷にいらして下さい。この大陸で一番目立つ建物がレッジャーノ家の屋敷になります」
金持ちの大好きな自慢を織り交ぜながら、レッジャーノ親子は去っていった。
「すぐ来て下され！　がっはっは」
時間はいつでも良かったんじゃないのかよ？
俺が不機嫌そうな顔でホテルの入り口を睨んでいると、秋留が話し始めた。
「どう思った？　あの親子」
「典型的なわがまま金持ち親子」
俺の即答に思わず秋留が笑う。ああ、その笑顔が素敵だよ。
「そう、お金持ちだよね。お金持ちとコネがあるのは色々有利だよ」
ふむふむ。確かに。でもそれだけか？
「海に立派なボートがあったの見た？」
秋留の急な質問。
俺の観察力を舐めてもらっては困る。確かに十人は乗れそうなボートがあった。しかも魔力で動くエンジンみたいなものが搭載されているのも見た。
「ジェット・レッジャーノ号って書いてあったな」
「それは良いネーミングですな」
今まで沈黙を保っていたジェットが言った。秋留の魔力がこもってないと、ここまでボケボケとなってしまうのか……。

「レッジャーノ……。あの親子が所有している船な訳か」
「そういう事。カリューがあんな状態だから、もしかしたら商人の船に乗せてもらえなくなるかもしれないし。乗せてもらえたとしても、あの船が出港出来る状態になるまで待てないかもしれないでしょ？」
確かに。凶暴な獣と化したカリューを船に乗せようとは誰も思わないだろう。
それに俺達が乗ってきた船の修理に時間がかかっているのだ。
今まで海賊に海路を襲われていたせいで、この島に貯蓄してあった船の修理に必要な材料も少なくなっていたのが原因だ。
「さすが秋留だな。そこまで一瞬で考えられるなんて尊敬するよ」
「へへ……」
秋留が照れた。ああ、照れてる顔も素敵だよ。
「まぁ、魔法を教えてくれって言われた瞬間は、凄い間抜けな顔してたけどな」
「ぷう！　そういうところは見ないの！」
秋留の怒った顔も素敵だ……と、そろそろ暴走するのも止めておこう。仕舞いには秋留を襲いかねない。
「それに」
秋留が立ち上がると同時にジェットも重い腰を上げる。
「魔法の授業料も貰えるかもしれないじゃん？」
しっかりしてる。俺よりも金には執着心があるんじゃないだろうか？
俺達は準備をするために一度部屋に戻った。

「おっ待たせ～」
秋留がホテルから出てきた。魔法を教えるという事もあり月の形をした、宝玉がついた杖を手に持っている。その杖にはどこかの町で購入した堕天使のお守りとかいうヘンテコな人形もついている。
「まだジェットが来ないんだ」

「ああ、ジェット？　魔力充電中につき部屋で灰になっていると思うよ」
「……」
なるべく余計な事を考えないようにして俺は秋留の隣を歩き始めた。あれ？　秋留と二人っきりじゃないか！
これは幸せだ。ああ、でもこれから向かう場所は地獄だからなぁ……。
「レッジャーノ家は大陸の西の外れにあるらしいよ」
さすがに秋留のリサーチは完了しているらしい。いつも関心するのだが、秋留はいつ色々な情報を仕入れているのだろう？
「歩いて二、三十分ってところか？」
「そうだね。ノンビリ行こう～！」
秋留と、大陸を横に二分する中規模の川岸を歩く。
道は整備されていて所々には南国特有の花が咲いている。秋留と歩く幸せな時間。この時間がいつまでも続けばいいのに……。
「着いたみたいだよ、ブレイブ」
はっ！
ぼけ～っとしている間にもうレッジャーノ家の前まで来てしまったらしい。何て勿体無い事をしてしまったんだ……。
「ブレイブ、何うな垂れてんの？」
秋留に袖口を引っ張られながら、俺達はレッジャーノ家の門をくぐった。

第三章　魔法の授業

「早速来ていただけたんですか！　ありがたい、ありがたい……」
先程の金持ちオッサンが葉巻を吸いながら頷く。名前をパルメザン・レッジャーノと言うらしい。そして肥えたパルメザンの陰にいるのが、クリオネア・レッジャーノという一人娘。母親はクリオネアが小さい時に病気で亡くなってしまったらしい。
目の前の生意気な少女は、男親に育てられたという感じがありありと出ている。
「お姉ちゃん……」
クリオネアが秋留の前に出てきた。秋留に少しでも怪しいことをしたら頭を吹き飛ばしてやる。
「魔法が使えるの？」
秋留がニコリとして「ちょっとね」と答えた。
秋留は過去に魔法系の職業に複数就いた事がある。
そもそも人には素質というものがあり、魔法にもそれは当てはまる。秋留のように魔法系の職業に複数就いた事があるのは大変珍しい。「ちょっとね」どころの騒ぎではない……らしいが、俺も詳しい事は知らない。
「ね～ね～！　お姉ちゃんの職業は何？」
クリオネアが眼をキラキラさせながら尋ねる。俺への態度とはエラい違いだ。
「ちょっとマイナーだけど幻想士っていう職業に就いているんだよ」
「幻想士？　それはどんな職業なの？」
秋留は微笑むと、このデカイ屋敷を出るため、玄関に向かって歩き始めた。
「ちょっと野外授業してきますね」
「ああ、よろしく頼むぞ！」
秋留の台詞にパルメザンがデカい態度で答える。もう少し自重し

やがれ。

「説明するより実践あるのみでしょ！」

秋留が腰に手を当てて説明する。

クリオネアがワクワクしながら秋留の方を向いている。

よしっ！

魔法の実演でクリオネアにファイヤーバレットでもお見舞いしてやれ！

「じゃあ、ブレイブ、手伝って」

「任せろ！　……え？」

俺は意気込んで答えたが、まさか俺で魔法を試すつもりなのか？

「今からクリオネアにちょっとした魔法をかけるわね」

「クリアって呼んで～」

クリオネアが甘えた声で秋留に言った。まさか、こいつも秋留の色香にやられたんじゃないだろうな？　俺のライバルか？

「じゃあ、クリア。これからクリアにかける魔法は別に危険なものじゃないわ。少しの間姿を見えなくする特別な霧を、クリアの周りに発生させるの」

クリアが元気よく頷く。

ん？

この状況で俺は一体何を手伝えば良いんだ？

俺の疑問などは無視して、秋留は大きく円を描くように手を動かし始めた。

「幻想術は神聖魔法やラーズ魔法の様に特別な呪文を唱える訳ではないんだ。今の秋留のように不思議な動きをする事により魔法を発動させるんだぞ！」

俺も魔法に関してちょっと位の知識はあるんだぞ、というアピールを込めてクリアに言った。

「静寂の蜃気楼！」

秋留が幻想術の一つである魔法を唱えた。

見る見るうちにクリアを中心に濃い霧が広がっていく。
「この魔法は姿を見えなくするだけじゃないの。他の人を惑わす効果もあるから、気配とか呼吸とかを察知するのも難しいのよ」
え？
それは知らなかった。以前に秋留に魔法をかけてもらったが、ただ単に姿を見えなくする魔法だと思っていた。
「そ・れ・に！」
そこでビシッと秋留が俺の方を指差した。
「呪文は唱えてるんだよ、ブレイブ。この世界で魔法と名の付くものは大抵呪文が必要なの」
え？
それも知らなかった。確かに幻想術の時は何やらモニョモニョと喋っている気がしていたが……。呪文だったのか。
「クリア、試しにブレイブに攻撃してごらん？」
秋留の悪魔のような笑みが見える。
いてっ！
俺の可愛い尻が思いっきり蹴られた。俺は咄嗟に後ろを振り返ったが、辺り一面が霧に包まれていてクリアの姿を捉える事が出来ない。
ぎゅううっ！
次は脇腹を思いっきりつねられた。
「手加減しろ！　この野郎！」
「あはははははは……」
秋留、酷い。でもその楽しそうな笑顔が素敵だよ。
ごんっ。
あう！　そこは痛いって……。
霧の中からクリアが大笑いしながら姿を現した。その姿がぼやけて見える。どうやら俺の眼は涙目になっているようだ。
「あれ？　もう終わり？」
クリアが回りを見渡して秋留に尋ねた。

「うん。あんまりやるとブレイブが死んじゃうからね」
俺が痛みを堪えているのをさすがに気の毒に思ったのか、秋留が魔法を解いてくれたようだ。
「魔法って凄いんだね！」
そう言った後、クリアは意地悪そうな顔をして俺を見た。
「でも、ブレイブみたいに中途半端な知識は無い方がマシね！」
クリアはこれ以上ない程に上機嫌だが、相変わらず言う事がキツ過ぎる。
それにしても、さすが秋留。人を操るのが上手い。
「もっと教えて！　教えて！」
クリアが秋留の周りを回る。秋留への視線がクリアによって遮られて、うざい。
「まずは魔法系の職業にはどんな物があるのか教えてあげるね。う～んと書くもの、書くもの……」
秋留が辺りを見渡す。
俺もつられて辺りを見渡した。それにしても広い庭だ。所々にはヤシの木が植えられ、花壇も数多くあるようだ。少し離れた所のヤシの木から覗いている怪しげな男も、なぜかこの庭にマッチしている、……って誰だ、ありゃ？
「書くものでしょ？　任せてよ！」
クリアがポケットから小さなシルバーのベルを取り出して鳴らす。
ベルから上品な音色が辺りに響いた。
その音を聞いて、木の陰から覗いていた怪しげな男が凄い勢いで近づいてくる。
「どうされました？　クリア様……」
男は静かに言ったが、少しの距離を全力疾走したせいで大分肩が上下している。
「シープット、ここにホワイトボードを持ってきて頂戴」
「すぐにご用意致します」
シープットと呼ばれた男は凄い勢いで屋敷へと消えていった。あ

れが金持ちの必需品である執事という奴か？
俺が考えている間に屋敷からホワイトボードを担いだシープットが再登場した。
「こちらでよろしいですか？」
「ええ、ありがとうございます」
秋留が礼を言った。クリアは何も言わない。こりゃ、シープットも相当苦労しているに違いない。同じ男として同情するぞ。
そのシープットは先程と全く同じ木の陰に隠れて、再び俺達の様子を観察し始めた。
「それじゃあ説明するわね」
秋留がホワイトボードにペンで文字を書き始めた。
『ラーズ魔法』
『ガイア魔法』
『召喚魔法』
秋留は有名な三種類の魔法をホワイトボードに書き示した。そう言えば秋留の字を初めて見るけど、容姿同様に流れるような素晴らしい字を書くもんだ。
「一番有名なのがラーズ魔法かな」
「ラーズ魔法？　ラーズ教会と何か関係があるの？」
「そう。ラーズ魔法を唱えるにはラーズ教団に認めてもらう必要があるの」
そう言って秋留は太腿が見えるようにスカートを捲り上げる。
そこには太陽の輝きのような奇妙な模様が彫られていた。それよりも俺は秋留の魅惑的な太腿に眼が行ってしまう。
「触っても良い？」
クリアが言う。秋留の弾ける様な太腿をクリアが撫でる。
クリアに便乗して撫でようとした俺の手は、秋留によって思いっきり払い落とされた。
「この印が教団に認めてもらったっていう証なの」
秋留がスカートの乱れを直す。ああ、良い眺めだったのになぁ。

「どういう仕組みかは分からないけど、この印がある事によって精霊の力をコントロール出来るようになって魔法が使えるという訳」
秋留が説明しながら少し離れた場所に立った。
「ブレイブ、そこに落ちている枝を持って掲げて」
またしても俺は実験台とされる訳か。
それでも秋留のお願いを断れるはずもなく、俺は素直に左手に持った枝を高く掲げた。
「炎の精霊イフリートよ、炎の弾丸で敵を撃ち抜け……」
呪文の詠唱に合わせて秋留の持った杖の前に小さな炎が生まれる。
「ファイヤーバレット！」
秋留の元から放たれた炎の弾丸が俺の持っていた枝を灰に変えた。
「あちっ！」
俺の手も微妙に焦げる。秋留の眼が「いけない事をする手にお仕置きしたのよ」と言っているから文句は言えない。
「うわ〜！　凄い！　こんな間近で魔法を見たの初めて！」
クリアが嬉しそうに秋留に近寄った。
「杖を持っていると威力が上がるの？」
秋留の持つ三日月のような飾りの付いた杖に触りながらクリアが訊いた。
「そう。精霊を制御し易いように作られた杖を持つ事により、魔法の威力が上がるのよ」
クリアは秋留から受け取った杖を珍しそうに必死に眺める。そのまま味まで確かめそうな勢いだ。
「この黒い人形は？」
「それは趣味。可愛いでしょ？　堕天使のお守りだよ」
クリアが再び嬉しそうに眼を輝かせながら人形を弄ぶ。
「良いな〜。アタシはお父さんがうるさくてあんまり出掛けられないから、変わったアクセサリーとか人形とかあんまり持ってないんだ〜……」
こいつ、秋留お気に入りの人形を奪うつもりか？　何て図々しい

奴なんだ！
「ふふ」
秋留は小さく笑うと堕天使の人形を杖から外そうとした。
「あれ？」
秋留が杖から必死に人形を外そうとしているが、全くビクともしないようだ。秋留が助けを求めるように俺を見つめている。しょうがない。秋留の優しさには逆らえないよな。
俺は秋留から杖を受け取ると堕天使の人形を外し始めた。
固い！
ただの紐で結ばれているだけなのに全く外れそうもない。
俺の隣でワクワクと見ていたクリアの顔が残念そうに俯く。
「ちょ、ちょっと待ってろよ。こんなの本気になれば……」
駄目だ。
手ごたえが全く無い。
「もう良いよ、お兄ちゃんじゃ力不足なのよ」
この生意気な娘を少しでも感心させてやる。
しかし俺の努力も空しく堕天使のお守りは全く外れようとしない。
「じゃあ、クリア。冒険先で珍しいアイテムを手に入れたらクリアに送ってあげるよ」
秋留がクリアに言った。
その台詞を聞いてクリアが嬉しそうに笑った。
「ありがとう！　お姉ちゃん！」
そう言ってクリアは俺の顔を一瞥した。まるで「役立たず」と言っているようだ。
俺も人の顔で考えている事が分かるようになって来たなぁ……。
「じゃあ授業の続きしようね」
秋留はクリアに魔法に関する説明をし始めた。
それから俺達はレッジャーノ邸で豪華な夕食を平らげると、薄暗くなった通りを宿屋目指して歩き始めた。

「秋留は何かを教えたりするの上手いよな」
二人で歩く大通り。何気ない秋留との会話。俺は今、猛烈に感動している！
「そう？」
「ああ、俺も大分勉強させて貰った」
秋留が微笑む。俺もつられて思わず笑ってしまった。生まれてこの方、盗賊以外の職業に就いた事のない俺は魔法の知識がほとんどない。
そもそも人には素質という物があり複数の職業に就けるという事自体が珍しいのだ。秋留の様に数多くの職業に就いた事があるという方が特別なのだ。
「精霊が実在しないエネルギーのようなものだとは知らなかったなぁ」
そう。
一般的には精霊は実在しないという事らしい。俺は今まで魔法というものは何か神々しい存在によって力を与えられているとばかり思っていた。
「でもね」
俺の台詞に反対するように秋留が話し始めた。
「私は、魔法は誰かの力を借りていると思っているの」
俺は黙って秋留の話を聞く事にした。さすが聞き上手。自分で言うのも何だが話すのは大の苦手だ。
「この道を彩っている街路樹や草花も同じ。どんな物にも命があって、魔法を使う時は皆の力を借りているんだなって……」
慈愛の天使だ。
俺の隣を歩いているのは大いなる存在に違いない。やっぱり女神だったか。
「まぁ、これはガイア教会の考え方なんだけどね」
「秋留はガイア魔法は使えないんだよな？」
「そうなの。母はガイア教の司祭なんだけどね……」

秋留は元々優しい性格だからな。
過激な攻撃魔法の多いラーズ魔法は使いたくないに違いない。
「まぁ、ラーズ魔法はカッコイイし強力だから大好きだけどね。逆にガイア魔法はショボイの多いからなぁ～」
がくっ。
身体の力が抜けてしまった。秋留って不思議だなぁ。
「ちょっと海にでも寄って行こうか？」
「いいね～」
ダメモトで誘ってみたが秋留から嬉しい回答が返って来た。俺はスキップしながら浜辺を目指して突き進む。
「何でそんなにテンション高くなってんの？」
秋留が後ろからついてきながら話し掛ける。
夜の海は静かだった。砂浜の所々でカップル達が愛をささやき合っている。良いムードだ。
しかし……。
「やった！　五回いった！」
秋留はハシャいだ。
俺は秋留と海に石を投げて跳ねた回数を競っている。全然ロマンチックじゃない。
「駄目だなぁ。見てろよ」
俺は適当に平らな石を選んで海に力いっぱい放り投げる。やけくそだ。
どぼんっ。
「あっはっはっはっは～。ブレイブ一回～！」
おかしい。計算ではこんな筈じゃなかったのに。
「そろそろ帰ろうか？」
俺は言った。秋留は残念そうに頷く。どうやらまだ石を投げ足りないようだ。しかし周りのカップルからウザったそうな視線を俺は感じている。俺達はムードをぶち壊しているに違いない。
「明日もクリアお嬢様に魔法のご教授に行くんだろ？」

宿屋まで後少しだ。
秋留との楽しい一時も後少しで終わってしまう。
「そうだね。なるべく恩を売っといてイザという時に役に立ってもらわないとね」
「あ、秋留！」
俺は突然叫んだ。なぜ？
「きゅ、急に大声出してどうしたの？」
俺の心臓が大きく波打つ。一体何を言おうとしているんだ？
「あ、明日も付き合うよ」
俺はこんな台詞を言うのにも勢いが必要なのか。悲しくなる。
「ふふ。よろしく」
そう言うと秋留はホテルの自分の部屋に消えていった。
いやぁ。今日は良い一日だった。

俺は雨の音で眼が覚めた。どうやら今日は雨らしい。これでは船の修理も手間取る事だろう。
朝食を部屋に運んできたメイドの話では、デズリーアイランドに雨が降るのは珍しいという事だ。
俺はパンを頬張りながらカーテンの隙間から見える外を眺めた。
こんな雨でも秋留と出掛けられるなら恵みの雨に見えるところが不思議だ。
俺は鞄からフード付きマントを取り出す。少し不恰好となるが冒険者にとって片手の塞がる傘は危険だからだ。
「待てよ……」
俺は取り出したマントを再度しまい、折りたたみ式の傘を取り出した。
神のお告げだ！
今日は傘で行こう！

がっくし。
外に出た俺を待っていたのは、ジェットの持つ傘の下に入った秋留の姿だった。秋留と俺の相合傘の大いなる夢が……。
俺は恨めしそうにジェットを睨みつけた。
「滅多に雨の降らないデズリーアイランドに雨が降る……。少しでも不穏な空気を感じたなら用心するのが正しいでしょ？」
秋留が俺を納得させるように言った。
確かにそうだ。
そもそも不思議だと思いつつ片手の塞がる傘を持ってきた俺の考え方がおかしいのだ。しかし今更引き返す事も出来ない俺は、傘を差しながらレッジャーノ邸への道を歩き始めた。
「昨日は身体に力が入らなかったからのぉ……。風邪が復活したのか心配したんじゃが、今日は元気バリバリですぞ！」
ジェットが言った。自分が死人だという事を忘れているんじゃないだろうか？　あまりにも残酷な内容なので秋留もジェットには説明していないらしい。
「歳なんだから気をつけてね」
秋留が言った。
死人で不死身なジェットが何を気をつける必要があるのやら……。
「まだまだ若いですぞ！」
ジェットが力拳を見せつける。生きていれば百十六歳の爺さんが良く言うよ……。
「どうしたんですかな？　あまり元気がないようですぞ、ブレイブ殿。風邪じゃないですかな？」
「いや、大丈夫だよ。ちょっと気分が悪いだけだ」
間違っても『機嫌が悪い』とは言えない。
暫くすると大きな豪邸が見えてきた。
初めて見るジェットは眼を丸くしている。
「チェンバー大陸の英雄と言われたワシも、こんな豪邸は見たことないですなぁ」

ジェットが関心している。
どこかで俺達の到着を監視していたかのように静かに目の前の門が開き始めた。
「雨の中、本日もようこそいらっしゃいました」
確かシープットと呼ばれていた執事だ。
「シープルさん、今日もよろしくお願いしますね」
いや、秋留、その人はシープットさんだよ。
「どうぞ、こちらへ……」
シープットは否定する事なく俺達を豪邸へと案内した。これが職人魂という奴か？
俺は小声で執事の名前はシープットである事を秋留に言った。秋留は顔を赤らめて下を向いてしまった。悪いことをしたかな？
「秋留おね～ちゃん！」
豪邸のドアを開けた途端にクリアが秋留の足に抱きついた。こいつドンドン馴れ馴れしくなってないか？
「今日は何を教えてくれるの？」
尻尾があるならクリアは千切れんばかりに振っているに違いない。まるで天使でも見るように眼をキラキラと輝かせている。そんな眼で秋留を見て良いのは俺だけだぞ！
「今日は雨だからね。お家の中で魔法について勉強しましょうか？」
「え～……」
クリアが不機嫌そうな声を出す。
何か良い方法はないかとアレコレ検討しているに違いない。その少ない脳みそで、どんなクダラナイ考えが湧き上がってくる事やら……。
「家の中じゃ魔法の実演は難しいよ。危ないし」
秋留が説得しようと頑張っている。
クリアの父親であるパルメザンも愛娘の機嫌を取ろうと必死だ。
ちなみに俺の隣には魔法の実演中であるジェットが、孫娘を見るようにクリアを眺めている。

「ワシにも孫がおってな……。懐かしい」
「え？　ジェットって子供がいたのか！」
衝撃の事実。
死人ライフを送っているジェットを見ていたので、生前どのような生活を送っていたのか考えたことが無かった。少なくとも俺は。
「そ～だ！」
俺の思考を中断するに十分な声量でクリアが叫んだ。
「アタシがよく探検ゴッゴしている洞窟に行ってみようよ！」
「たっ！　探検ゴッコ！」
パルメザンが叫んだ。娘が普段そんな危険な遊びをしているとは夢にも思っていなかったようだ。親の監督不行き届きという奴だな。
口をパクパクさせたパルメザンを置き去りにして、クリアは秋留の手を引っ張っていった。
「娘さんは責任をもって守ります故、ご安心下され」
ジェットはそう言うと秋留について行った。
最後に残された俺はパルメザンに何て言おう……。
「ブレイブ～！　置いてくよ～！」
今の幼い声はクリアだ！
あいつ、俺を呼び捨てだ。いつかこの甘い親父に代わって俺がお仕置きしてやる！
「娘さんの教育は任せて下さい」
俺はパルメザンに捨て台詞を残すと、傘を差して秋留達を追った。

「あと少しで洞窟に到着するよ」
デズリーアイランドの街並が見下ろせる高台。クリアお嬢様は随分遠くまで遊びに来ているんだな。こんな遠くまで来てモンスターに襲われたりしないんだろうか？
「この辺はモンスターとか出没しないの？」
俺の疑問を秋留が口にしてくれた。どうも俺はクリアと意思の疎通がし難い。

「前にお父さんから聞いたんだけど、この島はムォークムォーク大神様が守ってくれてるから滅多にモンスターは出現しないんだって」
秋留と一緒の傘に入っているクリアは嬉しくて仕方が無いようだ。意外なライバルが登場したものだ。しかし性別という壁は超えられまい。俺は秋留と結婚出来るがクリアは結婚出来ない。つまり俺の勝ちという訳だ。
「じゃあムォークムォーク大神様は休養中か？　この島に来てからもモンスターに襲われたからなぁ。クリアだって襲われてたじゃないか」
クリアとの意思疎通を頑張ってみようと思い俺は話しかけた。
「ブレイブが厄介ごとを引き連れてきそうな顔してるからじゃないの？」
「あはは！　クリア上手いこと言うね！」
秋留とクリアが仲良く笑っている。ああやっていると姉妹のようだ。性格は正反対だけどな！
「あ、後少しだよ。あそこの丘の反対側に洞窟があるんだ」
俺の後ろではジェットが立ち止まっている。
「どうした？」
ジェットに近づいて聞いた。
「何者かにつけけられている……」
ジェットが真剣な眼差しで辺りを見渡している。あ、そうか。ジェットは知らないんだった。
「レッジャーノ邸の門で出迎えた執事いただろ？　いつもクリアの様子を窺っているみたいなんだ」
俺は左後方の茂みを指差して言った。
俺に指を差されている事に気付いたシープットが慌てて隠れた。その反動で茂みが動く。
「まだまだですな」
「そうだな」
俺達は外で様子を窺うシープットを無視して洞窟へと入った。

「へ～……。立派な洞窟じゃないか」
俺は中を見渡して言った。
誰かが狩猟用に作った洞窟らしい。至る所に石を削って作った矢や木の棒が転がっている。洞窟の天井や道具の汚れ具合から見ても、ここ何年かは使われていないようだ。
「ここなら魔法の実演も出来るでしょ？」
「そうだね。じゃあその辺に椅子とかあるから並べよっか」
秋留の台詞に対してクリアが両手で遮る。
「良いの、良いの。こういう雑務はいつもの人にやってもらえば……」
クリアが小さなリュックから鈴を取り出そうとするのを秋留が制した。
「これくらいは私達で出来るわよ。一緒に準備するのも楽しいものよ？」
今にも洞窟の影から飛び出そうとしていたシープットがズッコケた音が聞こえた。
「秋留お姉ちゃんがそう言うなら……」
クリアは小さい身体で椅子を運び始めた。秋留は猛獣の調教も上手いようだ。
こうしてワイワイガヤガヤやりながら急ごしらえの教室が出来上がった。この洞窟を作った住人が使っていたと思われる黒板まであり、なかなかの教室ぶりだ。
「じゃあ今日も魔法の授業ね。昨日の続きから……」
こうして秋留教授のご講義が始まった。
洞窟の入り口近くにある木箱の裏でシープットも説明を聞きながら頷いている。
「じゃあ、実際に召喚魔法を見せてあげるね」
「よっ！　待ってました～！」
クリアが拍手する。遠くでシープットが小さく拍手している音も聞こえた。

「さっきも説明したように、ラーズ魔法と違って召喚魔法は実在する『霊獣』を召喚する事になるの……」
秋留が俺達から離れた場所に歩き始めた。
「まずは結構誰とでも契約しちゃう浮気な霊獣から召喚してみよっか？」
「霊獣ブレイブっていう名前？」
クリアの失礼な発言は続く。俺はシカトする事にした。そもそも俺は浮気症ではない、秋留一筋だ。
「我らが守護神バロンよ…」
秋留が召喚魔法を唱え始めた。冗談を言ったりして騒いでいたクリアも静かに見守る。
「悪を滅するため、その聖なる舞踏を我が前に繰り出し給え…」
秋留は呪文の詠唱を続けているが、いつものような何かが起きそうな気配を感じない。
「バロン・ダンス！」
……。

……。
何も起きない。失敗だろうか？
「やっぱり無理だったね」
秋留が肩の力を抜いた。
「こういう風に霊獣は存在する生き物だから、誰かが同じ召喚魔法を発動させていると現れてくれないのよ」
残念そうにしているクリアに近づいて秋留が更に説明した。
「あと重要なのはその霊獣との友好度ね。正直私は、バロンは浮気症だからあんまり好きじゃないの」
そう言って秋留はトコトコと洞窟の奥に歩き始めた。
「今回は戦いのためじゃないけどちょっと力を貸して……」
秋留が小さい声で呟いた。
こういう事に召喚魔法を使うのはあまり気が進まないらしい。優しい秋留ならではだ。ちなみにクリアが召喚魔法を覚えたとしたら

使われる側の霊獣に同情してしまいそうだ。
「岩山の巨人ジャイアントロックよ！」
お！
秋留の十八番だ。秋留はこの召喚魔法をよく使う。先程とは違い、呪文を唱え始めた途端に辺りの空気が震えだした。隣のクリアも身体を震わせながら辺りをキョロキョロしている。
「我の前にその力を示せ！　ジャイアント・フィンガー！」
秋留の叫びと同時に地面から巨大な岩で出来た指が飛び出した。その指がクリアの頭を撫でるように動いた後に地面に戻って消えていった。
まるで放心状態のクリア。
心配して秋留が近づいていくとクリアが大声で叫びながら走り回った。
「凄い！　凄い！　凄い！　格好良い～！」
クリアはドサクサにまぎれて俺の脚を蹴っていった。なぜ蹴られたんだ……。
「秋留お姉ちゃん、格好良い！　クリア、秋留お姉ちゃんが大好き！」
がーん！
先に告白された。何てことだ。こんな事なら昨日、夜の海に向かって「秋留の事が大好きだ～！」と青春しておけば良かった……。
「ふふ。ラーズ魔法とかガイア魔法と違って、召喚魔法は魔法の素質と霊獣と仲良くなる素質があれば使う事が出来るからね」
なるほど。
クリアには魔法の素質はあるかもしれないが、仲良くなるのは不可能だろう。どんな気の良い霊獣でもクリアの下で働く事はしないだろう。
あ。
霊獣シープットとかならクリアのために頑張って働くかもしれない。

「ぎゃあああ！」
その時、洞窟の入り口から霊獣シープットの叫び声が聞こえた。
俺とジェットは武器を構えて洞窟の方を振り返った。
洞窟の入り口にシープットが血を流して倒れているのが見える。
しかしモンスターのような姿は確認する事が出来ない。
「気を付けろ！」
「うむ」
ジェットがマジックレイピアを構える。魔力を帯びたレイピアが薄暗い洞窟付近を照らした。
外は雨が降っていて視界が悪い。しかしこの洞窟は崖に面しているため、あまり足場は無い。鳥系のモンスターだろうか？
「きゃあ！」
突然後方で叫び声が聞こえた。
振り返ると、洞窟の天井から垂れていた水滴が作った水溜りから、何かがニュニュニュとせり上がってきているのが見える。
俺は水溜りに向かってネカーとネマーをぶっ放した。せり上がってきていた水の塊が弾け飛んだが、何もなかったかのように再び形を作り始める。
「ぬおおおお！」
ジェットがマジックレイピアを水の塊に突き刺した。
破裂音と共に水の塊が四散したが、またしても何かを形成するかのように動き始める。
「女王シヴァの口付けは全てを凍らし、その抱擁は全ての自由を奪う……、アイスバインド！」
秋留が氷系の魔法を唱えた。
しかし秋留の掲げた杖からは何も放出されない。ラーズ魔法は精霊という名のエネルギーを使うから、召喚魔法のように使えない場合はないんじゃないのか？
とりあえず俺は時間を稼ぐためにネカーとネマーを連射して水の形成を止めようとした。

しかし俺の努力空しく、目の前には水溜りから出現した馬のようなモンスターが姿を現していた。肌の色は茶色なのに水のように攻撃を受け付けない。
「逃げるぞ！」
俺とジェットが馬モンスターの様子を窺っている間に、秋留がシープットを抱えてクリアと共に外に逃げ出す。
「ワシが時間を稼ぎます。ブレイブ殿は先に逃げて下され」
死人のジェットがそう言うならお言葉に甘えよう。俺はもう二、三発モンスターに打ち込むと洞窟の外に向かって走り出した。
しかし目の前には想像もしていなかった光景が広がっていた。
そこら中の水溜りから馬型モンスターが出現していたのだ。俺が見ている間も雨が新たな水溜りを作り、そこから馬モンスター出てくるが見える。
俺は今にも秋留に襲い掛かりそうな馬モンスターの頭を吹き飛ばした。しかしダメージは与えられないようだ。僅かに動きを止める事しか出来ない。
「魔法は？」
「駄目なの！　雨が降っていると炎系のエネルギーが集まり難いし、なぜか水系とか氷系の魔法は唱えられないし……」
話している間も馬モンスターが次々と襲い掛かってくる。
こっちは非戦闘員が二人もいる。守りながらの戦闘になってしまうため、完全に不利だ。こんな時にカリューがいれば……。
「ぐあああぁっ」
洞窟の中からジェットの呻き声が聞こえた。ジェットは死人と言っても痛みを感じる特別製だ。スマン、ジェット……。
「危ない！」
俺は秋留とクリアを突き飛ばした。
背中に痛みが走る。
「水の刃……」
秋留が呟いた。どうやらここに終結したモンスターは水を自在に

操る事が出来るようだ。だから秋留は水系や氷系の魔法を唱える事が出来なくなっているのか。
ちくしょう！
こいつらにはどうやったらダメージを与えられるんだ？
「きゃあっ！」
秋留の足から血が噴出した。
駄目だ！　このままじゃ全滅してしまう！
目の前から馬モンスター三匹が突進してきた。これで俺達も終わりとなってしまうのだろうか……。
「やめてー！」
クリアが叫んだ。
その声はこの雨の中で一際響いた。
馬モンスター達の動きが一斉に止まる。一体何が起きたんだ？
とりあえずこの隙にここから逃げよう！
うん？　こいつらタダのモンスターだよな？　何だ、こいつらの動きは？　まるで誰かに操られているかのような……。
俺は周囲を見渡した。
五感を研ぎ澄ますんだ。
俺は隣で脚を抑えて辺りをうかがっている秋留を見た。俺は何があっても秋留を守る！
秋留への想いを集中力に変換して俺は辺りを観察した。
一箇所だけ雨粒が地面に落ちていない場所があった。
まるで見えない傘が宙に浮いているような……。
俺はネカーとネマーに硬貨を補充すると、その不思議な空間に硬貨をありったけ叩き込んだ。
「フシャー！」
馬ではない別モンスターの鳴き声。
その鳴き声を残して、不思議な空間は無くなったようだ。
今まで俺達をグルリと囲んでいた馬モンスター達が突然、思考が無くなったかのようにバラバラの行動をし始めた。

何匹かが俺達の存在に気付いて襲い掛かって来ようとしている。
「女王シヴァの口付けは全てを凍らし、その抱擁は全ての自由を奪う！　アイスバインド！」
秋留が再び魔法を唱える。
今度は秋留の掲げた杖の先から魔法が放出された。
その魔法は馬モンスター一体を氷付けにした。俺は咄嗟にネカーとぶっ放して氷の塊を打ち砕く。
「今のうちに逃げるぞ！」
俺はシープットを背負い、秋留とクリアは手をつないでその場を逃げ出した。

ここはレッジャーノ邸の病室。
金持ちになると専用の病室まであるらしい。
そこにはシープットが寝かされていた。脇腹をざっくりといかれたようだ。
「全く……」
俺達もレッジャーノ家御用達の魔法医に傷の手当てをしてもらっている最中だ。目の前ではパルメザンが苛立たしげに病室を行ったり来たりしている。
「貴方達に任せすぎましたね！」
自慢する訳ではないが、俺達でなければ全滅していたかもしれない。しかし間違ってもそんな火に油を注ぐような反論はしない。
「申し訳ありません」
秋留が何度目だか分からない謝罪をした。
俺も合わせて頭を下げる。
「そもそもなぜモンスターがそんなに大量に出現したのですか！貴方達、何者かに狙われているんじゃないんですか？」
冒険者をしていると色々と問題が発生する場合もある。
全く敵がいないと言ったら嘘になるが……。
「すみません」

俺達は謝りまくった末にようやく解放された。

「どうなってるんだ？」

まだ午後になったばかりだが、この島は最近モンスターが出現し易くなったという事で、観光客の姿が疎らになっていた。雨はすっかり止んでいる。

「う～ん……。とりあえずレッジャーノ家に恩を売る作戦は失敗に終わったかな……」

「昼飯食べて行くか？」

すぐそこにあるレストランを指差して聞いた。自然な流れで誘ったため何の違和感も無く秋留は頷いた。

「良いですな。丁度腹が減っていたんですじゃ」

俺はビックリして後ろを振り返った。いつの間にかジェットが舞い戻っていた。

「何とか復活して追いつく事が出来ました……水の刃で全身をバラバラにされまして……」

食事前には聞きたくない話題だ。

食欲が少し無くなったが、俺達はレストランへと入った。

「おや！　とうとう家の店にもレッド・ツイスターがお出ましになったかい！」

選んだレストランとしてはあまり良くなかったようだ。何だかツイてないな。

俺達はなるべく他の客と離れた場所で食事をし始めた。

「この大陸はムォークムォーク大神の加護でモンスターは滅多に襲って来なかったらしい……」

情報を整理するために秋留は声に出して説明し始めた。

「それが私達がこの大陸に来た後からモンスターが次々と出現し始めた」

「ワシらが戦ったモンスターの全てが水系モンスターである点も何かありそうですぞ」

ジェットは熱々の海鮮ドリアを食べながら補足した。
ここに来てまだ海の幸を食べるか……。飽きないのかな？
「統率されたモンスターの動きも気になる。まるで誰かに操られているような……」
俺もジェットに負けじと補足する。ちなみに俺の食べているのはカツ丼だ。
「モンスターを操るのは魔族と……獣使い……」
「獣使いに恨まれるような事した覚えは無いんだけどな～」
秋留は頬杖を付きながら言った。秋留は注文したスパゲッティミートソースには手を付けていないようだ。
「最近だとラムズか？」
「あ！　そっか！　そんな奴いたね……」
確かにあいつは凶暴でも無かったし、あまり苦戦もさせられなかったから印象薄いけどな。秋留でも忘れてしまう程の存在だったという事か。
「今からカリューの様子を見るついでにラムズの様子も見てこようか？」
秋留の提案に俺とジェットは頷くと体力を取り戻すために急いで昼食を食べ始めた。秋留も美味しそうにスパゲッティを食べている。
さて。
カリューは元気にしているかな？　こんな大変な時に暴走しやがって！　正気に戻ったら文句を言いまくってやるぞ。

第四章　脱獄

カリューは治安維持協会傍の留置所に収容されている。
この留置所で暫く過ごした後、アステカ大陸から来る治安維持協会の船で輸送される事になる。その前にカリューを何とかしないと、自称勇者で元人間の獣人が囚人になる、というややこしい状態になってしまう。
前方から来た人が俺にぶつかって来たが、謝りもしないで走り抜けた。気付けば他にも何人かが俺達の向かう方向から走ってきているようだ。
耳を澄ますと人の叫び声や怒号が聞こえる。
「何かあったみたいだな」
俺達三人は頷くと人の流れに逆らうようにして走り始めた。何だか知らないけど嫌な予感がする。なにせカリューはトラブルメーカーだからな……。
俺の悪い予感は的中した。
小さいが頑丈そうなレンガで作られた留置所周辺で治安維持協会員達が慌しく動き回っている。
「お前は南側を探索しろ！　てめぇは他の罪人が逃げないように見張ってろ！」
忙しそうに怒鳴っていたタイガーウォンが俺達の姿を見つけると、鬼のような形相で近づいてきた。
「ブレイブ、どこ行くの！」
俺の本能がこの場から離れろと告げているのに、秋留が逃げようとする俺の襟をむんずと掴んでいる。
「遅かったな、レッド・ツイスター……」
嫌味たっぷりな口調でタイガーウォンが口を開いた。タイガーウォンの口から放たれる安物の葉巻のような異臭が気持ち悪い。
「海賊一味が留置所から脱走した。獣人カリューがその逃亡を助け

たようだ」
「……」
「……」
「……」
俺達三人は仲良く沈黙した。冷静な秋留もあまりのショックに声が出ないようだ。
「ラムズじゃなくて、カリュー？」
頭の中の整理も出来ていない状態で秋留が疑問を口にした。まぁ、ようするに脱走の実行犯はラムズじゃないのか、と言いたいようだ。
「……？　ああ、あんな気弱な海賊の仕業じゃないな。騒ぎを聞きつけて俺が留置所に向かった時には先陣を切ってカリューが突っ込んで来た」
そう言ってタイガーウォンが悪趣味なアロハシャツを捲って脇腹を見せる。そこには獣に切り裂かれたように真っ赤な傷が痛々しく残っていた。
完璧な獣となったカリューを、ラムズが操っていたんだろう。
秋留の幻想術では人としての意識がなくなったカリューを操る事ができなくても、獣使いの能力があれば操れる。
「責任をもって全員捕まえて来ます」
秋留が言った。
「再度、報奨金を要求しようなんて考えてないから安心してくれ」
俺の台詞にタイガーウォンだけでなく秋留とジェットまで白い眼で見てきた。
「冗談だよ、冗談……」
冗談で言った台詞ではなかったのだが、空気が悪くなってしまったのでフォローしておく。ちなみにカリューを捕まえた時の報奨金はいくらだろうなぁ。
「奴ら、俺達をかく乱させるために散り散りになって逃げ出したようだ。どこかで落ち合う約束をしているに違いない。とりあえず我々の方は港を押さえたが……」

この島からは逃がさない、という事か。
いくら海賊だからと言って泳いで逃げるような事はしないだろうしな。港を押さえたタイガーウォンの判断は間違いではないだろう。
「ブレイブ！　ジェット！　行くよ！」
秋留が走り出す。
俺とジェットは眼を合わせると気合を入れて走り始めた。馬鹿カリューめ！　一体、何をやっているんだ！　暴走し過ぎだ！

「さて、この辺で一回周りの様子を窺うわ。ブレイブも神経を研ぎ澄ませて海賊達を探して！」
タイガーウォンから少し離れた場所で秋留が言った。
あいつのすぐ傍では集中できないから魔法を唱えたりするのは無理だろう。俺は辺りを注意して観察した。右往左往している住人や治安維持協会員が目立つ。
「天空の覇者ホルスよ、その眼力で万物を捉えよ、ホーク・アイ」
秋留が魔法を唱えた。
ホーク・アイは鳥の霊獣を召喚する魔法だ。空中を飛び回るホルスの眼と秋留の眼がリンクする。この魔法を唱えている時の秋留の眼は鷹の様に鋭くなる。可愛い眼が台無しだよ、秋留。
「う～ん……。奴ら海賊だけあって気配を消したり隠れたりするのは上手いみたいだね。明らかな陽動作戦を実行している海賊もいるけど……」
秋留が上空を見ながらキョロキョロしている。
俺も辺りを窺うがサッパリ海賊共の気配を捉える事は出来ない、というかそもそも俺の能力はそこまで広範囲じゃないぞ！
「駄目、見つからないわ」
秋留が残念そうに魔法の効力を解放して言った。今はいつもの可愛い眼に戻っている。
「カリューの馬鹿野郎ー！」
俺は力の限り叫んだ。

その後、聴覚に全神経を注ぐ。
……。
……。
駄目だ。俺の罵声にカリューが反応すれば儲け物と思っていたが、少し離れた場所で指示しているタイガーウォンや、隣で「急に大声出さないでよ！」と怒っている秋留の声しか聞こえない。
「俺の勘で行くと……」
「北側に広がる森ね」
秋留に先に言われた。森に潜めば追っ手を各個撃破する事が出来るし、盗賊や海賊は対人の罠等を張る能力を持った奴もいる。ちなみに俺には罠を見破る能力はあるが、罠を作る能力は無い。何気に不器用だからな。
俺達は森に向かって走った。
同じ様に森が怪しいと踏んだ治安維持協会員が隣で併走している。
「やっぱり森が怪しいですよね」
髪を茶色に染めて肩まで伸ばしている協会員が言った。同じ方向に進んで足手まといにならなければ良いが……。
協会員が足元の石を踏みつけた時に嫌な音が聞こえた。悪海賊達が仕掛けた罠を作動させたようだ。俺達の目の前に枝が鋭く尖った木片が勢いよく飛んできた。
俺は素早く両銃を構えた。
「むぉーく！」
罠を作動させた協会員が謎の雄叫びを挙げて、木片に向かって飛び蹴りを放った。木片が粉々になる。
「すみません！　罠を作動させてしまったみたいですね」
何事も無かったかのように協会員が言った。
俺は黙って銃をホルスターに戻す。
「協会員さん、武術が得意なの？」
「私、治安維持協会員のボブと言います」
秋留の質問にボブが答える。ボブか。全国のボブには悪いが個性

の無い名前だ。
「この島の治安維持協会で働く者は誰でもムォーク武術が使えるんですよ。私なんてまだまだ下っ端でして……」
恥ずかしそうにボブが頭を掻く。
しかし今の蹴り……。技の速さと威力……。下っ端というには不自然だ。
なるほど。
俺が気絶した後に暴れたカリューを生け捕りに出来たのも少し頷けるな。ムォーク武術等と言うふざけた名前でなければ俺も入門を考えていたところだ。
「いくら体術が得意と言っても、罠には気を付けてくれよ」
「のわあああ！」
俺の後ろから付いてきていたジェットが罠にかかったようだ。心臓の位置に木の枝が突き刺さっている。
「う、うわあああああ！」
心臓に枝が突き刺さったまま走っているジェットの姿を見て、ボブが悲鳴を上げて卒倒した。
俺達は放っておいて森深くに向かって突き進んだ。ついてこられても、足手まといになったに違いない。
「痛いですぞ」
ジェットが涙目になりながら心臓から鋭い枝を抜き取った。ゾンビであるジェットの身体からは血が一滴も垂れない。
「奴ら本気で追っ手を殺そうとしているな」
「手加減する理由はないでしょ」
秋留が冷静に答えた。
そろそろだろうか。
俺は立ち止まる。俺の動きに合わせて秋留とジェットも立ち止まった。
辺りを注意深く窺った。
低い獣の唸り声が空気を揺らす。カリューだろうか？

地面に広がる草を踏みしめる音が俺達の周りから聞こえて来た。どうやらすっかり囲まれていたようだ。
「また水系モンスターですな」
俺の目の前でジェットの胸に空いた穴がウニュウニュと塞がったのが見えた。これを見てしまうと暫く食欲が無くなるのだ。もう少しコッソリと修復して貰いたい。
三又の槍を構えた半魚人、頻繁に手足を揺らすタコモンスター、頭の上のサクランボのような物を揺らして近づいてくるワニ……。
俺はネカーとネマーをぶっ放して近づいてくるモンスターを片っ端から吹き飛ばしていった。
ジェットも負けじと魔力を込めたレイピアでモンスター達を爆殺していく。
「死を悟った嵐の猛攻は……仇名す者を滅ぼす爆風となる……ウィンドボム！」
秋留の呪文をトリガにして、群れを成すモンスターの中心に向かって急激に空気が集まっていく。刹那、集まった空気が一気に破裂した。
耳を覆いたくなるような爆裂音が辺りに響き渡る。モンスター達の身体のパーツが散乱した。
「激しいな」
「ちょっとね」
秋留の方に降りかかってくる肉片を、背中で見守っていたブラドーが防ぐ。ご主人様を守る忠実な僕という訳だ。
ついでにそのご主人様の最愛の俺に降りかかってくる肉片も払ってくれれば良いのに。
俺は肩に降ってきた、深く考えたくない柔らかいものをネカーの銃身で払った。
「相変わらず派手だな」
有無を言わさず、声の聞こえて来た方に硬貨をぶっ放す。
この大陸に来てからも見たことのある亀の甲羅に硬貨はあっけな

く弾かれた。あらかじめ軌道は防いでいたようだ。
今の声はラムズに違いない。あまり特徴のある声ではないので覚えにくいが、目の前に現れた亀のモンスターがその証拠だ。
ラムズの忠実な僕である亀のモンスター、タトールだ。
「また痛い目に合いたいらしいな」
腰に手を当てて堂々と言ってやった。
「ブレイブはラムズとは大して戦ってないでしょ」
秋留がボソリと言ったが気にせず続ける事にする。
「そんなモンスターの陰、更には頑丈そうな木の陰に隠れながら喋るんじゃねぇ、正々堂々姿を見せろ」
「うるせえ！　黙れ！」
……。
ラムズからの予想外の応答に一瞬うろたえてしまった。あいつ、あんなキャラクターだったっけか？
「ブレイブ、危ないよ」
なぜか秋留がブラドーの力を借りて近くの木にぶら下がっている。そんな秋留をローアングルから見上げて少し幸せな気分を味わっていると、何かに足を取られた。
森の中に洪水が発生していた。
俺は大量の水と共に後方に流される。途中で数本の木に身体を打ち付けるというオマケ付きだ。
どうやらタトールが大量の水を発生させたらしい。あいつは水を操ることが出来るモンスターなのだ。
「ちっ」
俺は周りを見渡して舌打ちをした。水に流されたせいでモンスターが群れを成していた中心に来てしまったようだ。
俺は両手に持ったネカーとネマーを構えてトリガを引いた。
あれ？
硬貨が発射されない。
というか、俺が持っているのは何だ？　木の枝？

「ブレイブ～！　銃が二つともココに落ちてるよ～」
少し離れた場所に俺の長年の相棒である二丁の銃が落ちている。
後方から襲ってきていたモンスターを腰に装備した黒い短剣で切り落とす。続いて飛んできた槍を同じく短剣で払う。俺は銃だけではなく短剣の扱いも神がかってきたようだ。
襲い来るモンスターを短剣で切り倒し、銃の元まで辿り着いた。
「やっぱり手に馴染む」
ネカーとネマーを構えて辺りのモンスターの眉間を打ち抜いていく。
それにしても敵が多い。
少し離れた所で秋留も魔法を放ったりしているようだが、若干疲れてきているようだ。ジェットは最小限の動きでモンスター共を三枚におろしている。
いくら雑魚だからと言ってもキリがないぞ。
「こういう集団に襲われる回数が多い気がするのは、気のせいですかな？」
近くで戦っていたジェットの何気ない一言。
確かに。
俺達はモンスターの大群と戦う事が圧倒的に多い気がする。中でもゴールドウィッシュ大陸でのモンスターの大群との戦闘は一番の規模だったかな。何しろ俺達がレッド・ツイスターと呼ばれるようなった戦闘でもあるから……。
「うおっ！」
過去の思い出を振り返っている場合ではなかった。
目の前に繰り出されたサーベルをギリギリのタイミングでかわして、モンスターのデカイ腹に硬貨を叩き込んだ。
ラムズを狙おう。
こういう操られたモンスターを大人しくさせるには、その親玉を倒すのが一番手っ取り早い。俺は襲って来るモンスターを倒しつつラムズを探した。

先程いた大木の後ろには既にいないようだ。
そういえば、襲って来るモンスター達の動きに迷いが生じ始めている気がする。操縦者であるラムズが戦線から離脱したか？
「本気じゃない……時間稼ぎ？」
秋留が頭をクルクルと回している。俺には想像も出来ない程に頭をフル活用しているに違いない。
「ジェット！　ブレイブ！」
秋留が走り出す。
「街に戻るよ！」
俺達三人はモンスターの包囲網を突破した。包囲網と言っても既にほとんどのモンスターは散開していたようだが。
「ホーク・アイ！」
走りながら秋留は呪文を唱えていたようだ。再び秋留の眼が鋭い鷹の眼のようになる。
秋留が辺りを窺うようにキョロキョロとしているが、実際に秋留が見ているのは遥か上空から見るデズリーアイランドの街並だろう。
でも秋留。
走りながらキョロキョロしてたら危ないんじゃないか？　ホーク・アイの召喚魔法を使っている間、秋留は今走っているこの景色は見えているのだろうか。
足元に転がっていたジョン？　ボブだっけか？　まぁどっちでも良いが先程、ジェットのゾンビっぷりを目の当たりにして卒倒した治安維持協会員を踏んづけて走り続けているところを見ると、前は見えていないようだ。。
俺は危うく木に激突しそうになった秋留の手を引っ張った。
「ありがとう、ブレイブ」
秋留が恥ずかしそうに言った。
あ！
俺は咄嗟の事で気にしてなかったが、秋留の手を普通に握ってしまっていた。慌てて手を離す。秋留の顔を窺うといつの間にか、い

つもの可愛い瞳に戻っていた。
「痛っ！」
俺は頭を抑えた。それでも遅れないように足は走り続けているあたりが、冒険者としての根性か、悲しい性か。
「ちゃんと前見てないと木にぶつかるよ」
「そういう時はちゃんと手を引っ張ってくれないと！」
秋留が笑った。しかしすぐに真顔に戻る。
「レッジャーノ邸に海賊達が集まっていたわ」
秋留が言った。
「人質を取る気ですな！　卑劣な！」
ジェットが白い顔を若干赤くして怒鳴る。ジェットは卑怯な事が嫌いらしい。う～ん。俺はジェットに好かれているだろうか？
俺達は走るスピードを上げた。どうやらこのメンバーでは俺が一番体力があるようだ。二人との距離が若干開いてきた。
「先に行って！」
俺は秋留に促されて更に速度を上げた。秋留の前だから我慢しているが、既に息が上がってきている。船上暮らしが長かったせいで体力が少し落ちたようだ。
結構森の中までおびき出されてしまったが、ようやく森が開けてきた。
陽動作戦をしている海賊の一人だろうか。少し離れた所からターバンを巻いた海賊が突然短剣を投げようとしてきた。
海賊が短剣を投げるより早く、俺はネカーから発射された石の硬貨を顔面にぶち当てる。こんな雑魚には構っていられない。
と、倒れた海賊の横をすり抜ける時に足首を捕まれた。
「この不死身のボナンザ様にそんな攻撃が通じるものか！」
両鼻から豪快に血を流しているボナンザと名乗った海賊が、俺の足首を掴んだまま見上げて言った。
「不死身は足りてる！　雑魚のくせに名乗るな！」
俺は至近距離から名も無い海賊の脳天に石の硬貨を叩き込む。

めりっ。
石の硬貨が頭に若干めり込んだようだ。まぁ、不死身と名乗ったのだから不死身なのだろう。
海賊は白眼を剥いてその場に倒れこんだ。
俺は何事も無かったかのようにその場を走り去る。
「！」
俺は目の前の光景を見て愕然とした。
この大陸を大きく二つに割っている崖があるのだが、その崖にかけられている数少ない橋が破壊されている。
壊された橋の向こう側、対岸にムカツク笑みを浮かべた海賊がいる。
とりあえず俺は何も解決されない事とは分かりつつ、その海賊の腹に弾丸を撃ち込んだ。声を発する事も出来ずにニヤニヤ顔の海賊がその場に倒れた。
「どうするか……」
辺りを見渡す。
まさかカリューのようにジャンプする訳にもいかない。
秋留の魔法なら何とかなるかもしれないが、さすがに先行していた俺が後方から来る秋留達を待っていたら格好悪過ぎる。
「久しぶりに盗賊らしい事もしておくか」
俺は誰に言うともなしに呟くと鞄からロープを取り出した。タコの身体に巻きつけようとしたあのロープだ。
勿論、あれから手入れをしたためロープがヌメヌメしている事なんてない。何せ俺は綺麗好きだから。
大きく円を描くようにロープを振り回す。目指すは崖の向こう、最短距離の場所にある太い幹のある大木だ。
勢いを付けるためにロープの先は若干重くなっている。そのロープの先端が上手く太い枝に巻きついた。
「よし！」
思いっきり引っ張ってロープが外れたり、枝が折れたりしない事

を確認して崖へと飛び出す。
身体が風を切った。俺は何事も無かったかのように対岸へと着地する。
盗賊というものは誰が作ったかも分からないような遺跡や廃墟に潜り込んで、目当ての宝を探したりもする。トレジャーハントをしていると目の前に口を開けた大穴が待っている事も少なくはない。そんな時、俺が今やったようなロープアクションというものは重要になってくるのだ。
と、一人で考えながら高価だったロープを木に登って取り外す。
「勿体無いオバケが出てくるからな」
俺は何かを納得させるように大きめの声で言うと、レッジャーノ邸目指して再び走り始めた。
俺は増えてきた海賊達を一人一人撃破しながらひたすら走り続けた。多めに持ってきていた硬貨も心細い量になってきている。
「こいつは怪しそうだな」
俺は今倒したばかりの海賊の靴を見つめた。明らかに靴底が分厚いんじゃないか？
俺は腰から短剣を抜き出すと靴底を両断した。
「うっ！」
目の前で大の字になって倒れている海賊が呻いた。若干足の裏まで切ってしまったようだが気にしない。
やはり。
俺は靴底から出てきた硬貨を銭袋に補充した。しめしめ。金で出来た十万カリム硬貨もあったぞ。
こういう集団で行動する、とくに盗賊や海賊は個人の財産を保持しておく場所がない。そういう奴は普段身に着けている服や装備品に財産を隠しておく事が多い。根性のある奴だと身体の中など様々だ。
俺は心機一転、レッジャーノ邸目指して邁進し始めた。
そろそろだろうか。

俺は海賊達の能力を考えて、気配を消し始めた。雑魚敵と戦うのも危険だ。
相手が人質を取っているのなら尚更、バレないように近づいて人質を奪取したい。
レッジャーノ邸が木に囲まれていて助かった。
どうやらまだ海賊達に俺の接近は気付かれていないようだ。モンスターの姿も見えないところを見ると、ラムズとタトールコンビは別行動をしていらしい。好都合だ。
俺は敢えて正面玄関から近づいていった。逆に建物の裏は警戒しているような気がしたからだ。
「うわあああ！」
男の叫び声が聞こえてきた。
視線をレッジャーノ邸の広い庭に集中する。ちなみに俺は辺りが観察出来るように少し大きめの木に登っている。
数多くいる執事だろう。
ウェイターのような服を着た中年のおっさんが血を流して倒れている。その周りには武器を持った家政婦や農耕具を持った爺さんなどが群がっている。どう考えても非戦闘員、役に立ちそうもないし、放っておいたら次々と死体が増えてしまいそうだ。
「他の冒険者はいねえのかよ……」
口の中で呟いて辺りを見渡す。
「！」
他の冒険者……。
そして治安維持協会員だろう。揃いの水色のスーツを着た男達が一匹の青い毛並みの獣人を取り囲んでいる。場所はレッジャーノ邸の正門の右。丁度街から来る救援が最初に登場してくる場所だ。
俺の見ている目の前で治安維持協会員の一人が首を噛み切られた。
最早、カリューの面影は微塵も残っていない。凶暴な獣人……いや、モンスターと言っても問題ない。
カリューの周りにはレッジャーノ邸の庭とは比べ物にならない程

の屍。原型を留めていない亡骸も数多くあるようだ。
その中で唯一頑張っているのがタイガーウォン。
身体中に傷を負いながらも凶暴なカリューと肉弾戦を繰り広げている。
よし。
まずはクリアを探そう。一番人質にされる可能性が高い人物。レッジャーノ家の一人娘であるクリアはどこだ？
「あっ！」
俺は思わず木から落ちた。
俺が最後に木の上から見た光景は、両手で構えたトンカチを振り回しながら館の中から出てくるクリアの姿だった。
「てめぇ！　何してやがる！」
さすがに木の上から落ちてきたら敵にバレるだろう。
こうなってしまっては仕方がない。
敵を蹴散らしつつクリアの場所までたどり着こう。
俺は近づいてきた海賊の攻撃を難なくかわすと、背中に肘打ちを食らわしてから走り始めた。
「盗賊だ！　あの時の盗賊が姿を現したぞ！」
海上で俺達レッド・ツイスターと戦った事を覚えているのだろう。一人の海賊が騒ぎ出した。袖の中に隠し持っていた指の長さ程のナイフを投げつける。狙い通りにナイフは騒いでいた海賊の腹に刺さった。運が良ければ生き残るだろう。
左から迫ってきていた長髪の海賊がサーベルを振るった。あらかじめ予測していた俺は屈んでそれをかわし、短剣で海賊の太腿を切り裂いた。
「すぐに止血しないと死ぬぞ」
俺は軽く忠告してやると前方を睨みつけた。
ガタイの良い海賊が両手を広げて待ち構えている。全身に飛び道具を装備しているような俺と肉弾戦でもやろうっていうのか？
もう木の硬貨も石の硬貨も使い切ってしまった。千カリムにもな

る銅の硬貨を使いたくはなんだが……。
俺は断腸の思いでネカーとネマーに銅の硬貨を装填した。
ちなみに今入れた分は先程の靴底海賊からカッパらった硬貨だ。両銃に十枚ずつの硬貨が補充された。ちなみにネカーとネマーにはそれぞれ最大で二十枚の硬貨を込める事が出来る。
海賊の足を吹き飛ばして再起不能にしようとした矢先、その巨体が宙を舞った。
「がるるるる〜」
涎が滝のように流れている。ぼんやりと虹がかかっているように見えるのは現実逃避のせいか、俺が泣きたくなっているせいだろうか。
背中に龍を刺繍している凶暴そうな人間とは全く別の、死そのものを纏ったカリューが俺の目の前に立ちはだかった。
カリューは微動だにしない。
俺も両手に構えた銃を動かせない。最早思考能力がないはずのカリューが慎重に俺を観察しているようだ。絶好の獲物を見る目つきで。
俺とカリューとの距離は五メートルもないだろう。盗賊には距離感も重要なため間違いはないはず。
その中間に先程カリューに打ち上げられた海賊が落ちてきた。
その眼には最早生気が感じられない。頑丈そうな身体を貫いている爪跡が見えた。
地面に血の花を咲かせた海賊を飛び越えてカリューが仕掛けてきた。
やらなければやられる！
俺は銅の硬貨が込められた銃のトリガを引いた。普通の人間相手なら急所を狙えば確実に絶命させられる銅の硬貨だが、頑丈なモンスターと化したカリューになら致命傷にもならないかもしれない。
そんな俺の心配をよそにカリューは難なく俺の放った硬貨を避けた。

野生の勘とカリューの洞察力が上手くミックスされているようだ。
しかし洞察力では負ける訳にはいかない。
カリューの関節の動きに注意を払い、鋭い攻撃が繰り出される前に避ける。
それでも洞察力について来ない身体の動きのせいで俺は左胸にかすり傷を追った。いざという時の事を考えて鋼の糸が編みこまれた特注のダークスーツを装備してきていたのだが、何なく皮膚まで切り裂かれてしまった。
「このスーツ高いんだぞ！」
俺は素早い手の動きで左手に持っていたネカーを短剣に持ち替えて、すれ違い様にカリューの背中を切りつけた。カリューの背中から人間と同じ赤い血がほとばしる。しかし浅い！
方向転換したカリューが大口を開けて俺の背中を狙う。
俺はカリューとすれ違った事により目の前に見えたレッジャーノ邸目指して、何度目かのダッシュを開始した。
「ちっ」
カリューの鋭い牙が俺の背中をえぐったようだが、気にしている場合ではない。
カリューと戦闘をしつつクリアの元に行くんだ！
先程吹っ飛ばした巨体の海賊が頭に浮かぶ。
今のカリューは制御されていない。
だから仲間のはずの海賊も吹っ飛ばしたんだ。近くにラムズがいないせいだろう。それでも邪魔者を消すには十分過ぎるパワーがある。
このままクリアの元に辿り着ければ、とりあえずクリアが人質にされる事はなくなる。邪魔者は片っ端からカリューが倒してくれるだろうから。
俺はそこでクリアを助けて戦線から離脱すれば、後は何とかしてくれるだろう。後から来るであろう秋留が！
あそこでガロンに両手を羽交い絞めにされている、クリアの場所

まで辿り着ければ、後は……！

「ガロンか！」

海賊幹部のガロン。留置所に入れられていたせいか緑色で統一された趣味の悪い帽子とスーツは汚れているが、危険そうな顔付きは変わっていない。

そこら辺にいる雑魚海賊からならクリアを助け出せると思っていたが、ガロンとなると話は別だ。

しかし海上で戦った時とは違って、今は主力としていた散弾銃は持っていない。何とかなるだろうか？

「そろそろか」

獣の足に比べたら俺の走る速さなど役に立たない。それは分かっていた。

俺は後ろを確認するまでもなく急停止して左へと飛んだ。

両手の鋭い爪と大口を開けたカリューが俺の右側を通り過ぎていく。

「お座りだぜ！　カリュー！」

後方からカリューの背中に向けてネマーのトリガを引いた。ネマーが硬貨を放つ軽い反動を右手に感じたと同時に、カリューの背中から血が弾け飛びレッジャーノ邸の門に叩きつけられた。

やはり普通のモンスターよりは頑丈な身体をしているようで安心した。

カリューが腹を見せながら痙攣している。

獣が腹を見せるのは服従の証だっただろうか？　俺はそんな下らない事を考えながらレッジャーノ邸の庭に走りこんだ。

ガロンと眼が合う。

そして早すぎると感じる程の時間で意識を取り戻したカリューが、荒い息をして俺の後方からヨタヨタと近づいてくる。

「やはり現れたか。ラムズの時間稼ぎは少し足りなかったようだな」

ガロンは口にタバコを加えながら器用に喋っている。俺が頭をフル回転している間にガロンは更に続けた。

「いや、こうして人質を手に入れたんだ。時間稼ぎは十分だったかな」
俺には到底敵わないが、ある程度のスピードでガロンが銃を構えた。一体どこからそんな武器を調達したんだ？
何の躊躇もなくガロンが発砲してきた。脇腹に激痛が走る。
突然の事で全く反応出来なかった。
人間、何か行動を起こそうとする時は身体が少なからず動くものだ。盗賊の洞察力というものはその辺の反動を観察する事により行動を予測するのだが。
ガロンは身体への反動を起こす事なく、特定の場所を動かせるような訓練をしているに違いない。
「何やってんのよ、ブレイブ！　早くアタシを助けなさい！」
クリアの大声が傷に響く。
「ほう！　やはりこの小娘はレッド・ツイスターと面識があったか。ラムズの報告通りだな」
ラムズの報告か。
俺達がモンスターに襲われた時にクリアが一緒にいた事もあった。でもその時はラムズはまだ牢屋の中だったはず……。モンスターに襲われた時に姿を見かけた甲羅……タトールが俺達の事を観察して、海賊達がクリアを人質に取る計画を練ったという事か！
「ちっ！」
俺は思わず舌打ちした。
パルメザンの言った通り、狙われていたのは俺達だったか。罪の無い一般市民を巻き込む結果となってしまった。何としてでも名誉を挽回しないと！
俺は傷口を押さえて立ち上がった。あまりの痛さに気を失いそうになる。
「おっと！　怪しい行動を取るんじゃないぞ」
ガロンの銃口が俺の眉間を狙っている。こいつら悪海賊達は人を殺す事に何の躊躇もないようだ。そこが俺との大きな違いか……。

「負けたよ、行け……」
俺の台詞にクリアが考えられる限りの罵倒を俺に浴びせてくる。
「何だと？　そんな戯言が通用すると思っているのか！」
ガロンの冷徹な顔に影が落ちる。
「俺達のボスを殺したのはテメェらしいからな！」
もうガロンとの距離はほとんどない。
「死ね！」
瞬間、耳に全神経を注ぐ。トリガを引く、その時に銃の中から発せられる機械的な音を聞き取る。
俺は音に合わせて天を仰いだ。
額を銃弾が掠め、と言っても大分深くえぐられたが、致命傷は受けていない。
それでも血が噴出したため、ガロンは油断したに違いない。俺を倒したと。
「がうっ」
俺の後方で獣の呻き声が聞こえた。
人を平気で殺めるガロンよりも数倍凶暴なモンスター、カリュー。
「な！　俺が狙ったのはお前じゃないぞ！」
ガロンが慌ててカリューに弁解するが、獣使いでもないガロンの言葉が通じる訳もない。
地面に倒れた俺の視界に映ったのは肩口に銃弾を食らって、怒りに燃える瞳を輝かせたカリューだった。
そのカリューの身体が俺を飛び越えてガロンを襲う。
「ぐあっ！」
ガロンが叫んだ。それと同時にクリアの小さい悲鳴が聞こえた。
俺は死体のフリをしているため視界は天を向いているが、クリアの声が出た場所とガロンが叫んだ場所がズレているのは分かった。
俺は勢いよく起き上がると、クリアの悲鳴が聞こえた場所まで走った。顔面に血が流れているため視界はほとんど遮られているが、クリアの目立つ黄色い髪が俺の手の中に飛び込んできたのが確認出

来た。
「ブレイブ！」
怒っているのか感謝しているのか分からない口調でクリアが叫ぶ。耳元で怒鳴るな。
狭い視界だが眼を凝らすとガロンがカリューと格闘しているのが見える。
ガロンの被っていた帽子がカリューに切り裂かれた。
ガロンの白く長い髪が地面に散らばる。
「邪魔する奴は死ね！」
まずい！
カリューが殺されては元も子もない。そこまでは考えてなかったぞ！
俺は慌てて銃を構えようとしたが両手が動かない。下を見ると、またしてもクリアが俺の両手ごと身体に抱きついていた。
「ファイヤーバレット！」
頼もしい声と共に炎の弾丸がガロンの上に覆いかぶさっていたカリューを吹き飛ばした。
ガロンの放った弾丸はカリューの身体を外れる。
「相変わらず詰めが甘いよ、ブレイブは」
俺は振り返った。
そこには光り輝く秋留とお付きの老人の姿が見えた。
「秋留おね～ちゃ～ん！」
クリアが俺の元を離れ秋留に抱きついた。俺も便乗して抱きついてしまおうか。
「アタシ、怖かったよ～」
そもそも玄関からクリアがトンカチを持って飛び出してこなければ、こんな事にはならなかったんじゃないのか？　俺はあまり深く考えないように頭を振った。
「がうううううう」
散々ダメージを受けたカリューだが、身体から煙を発しながらも

攻撃してきた秋留の方を向いて唸る。カリューを攻撃してガロンから遠ざけてなかったら、今頃はカリューは死体になっていたかもしれないのに。
秋留に感謝しろ、カリュー！
「秋留お姉ちゃんに何をするつもり！」
クリアが叫ぶ。
その叫びにカリューの唸り声が一瞬止まった。
「ちっ！　分が悪いな……ボックス！」
ガロンが謎の単語を発した。ボックスって箱の事か？
「なんだい」
近くに置いてあった木箱から声が聞こえてきたようだ。確かにボックスだ。中に人でも入っているのだろうか。
え？
俺達の見ている目の前で木箱が形を変えていった。いや、正確には木箱に手足が生えていった。
いやいや。
俺が木箱だと思っていたのは、ただの茶色の服だったようだ。盗賊の眼を誤魔化せる程の限りなく木箱に近い体格。名前はボックスなのだろうか？
「この場所を突破して港に向かう。武器を出せ！」
ガロンに言われてボックスはおもむろに服の中に手を突っ込んだ。ボックスの懐から出てきたのは血だらけの爆弾だった。信じられん。あいつは身体の中に武器を隠し持っているのか。ガロンが銃を持っていたのも頷ける。
と驚いている場合ではない。奴らは逃げるつもりだ。
俺は銃を構えたが突然の疲労に襲われてその場に片足をついた。血を流しすぎたようだ。
「どけ」
俺は意識を失う直前にボックスが爆弾に火を付けたのが分かった。秋留はクリアを、ジェットが俺を抱えてその場を離れたのはすぐ後

だったに違いない……。

第五章　獣使い

優しく暖かい光が俺を包んでいるのが分かった。
まるで女神に抱擁されているかのようだ。
「ぬおおおおお」
俺の声ではない。何か傷みを堪えているかのような叫び声。
そんな声は放っておいて、俺は心地よい感触に酔いしれていた。
これはきっと、秋留が俺の頭を膝枕で支えてくれているに違いない。そして優しく回復魔法をかけてくれているに違いない。
「ふんんんぬうううう……」
またしても汚い声。
俺の幸せな時間を奪うのは何者だ。
俺は仕方なく眼を開いた。
「……」
目の前には顔中に冷や汗を垂らして身体中から煙を発しているジェットがいた。
「あ！　ブレイブ、気付いたみたいだよ！」
頭に響く高い声はクリアだろう。
「大量に出血してたから心配しちゃったよね」
これもクリア。
「まぁ、ブレイブの生命力はゴキちゃん並だからね」
俺は黒くて素早いあいつみたいな生命力はない。ゴキちゃん並の生命力と言ったらカリューだろう。あ、でも黒くて素早いのは俺も一緒か、と一人で苦笑いをする。
「ありがとう、ジェット。回復はもういいや」
半分投げやりな気持ちでジェットに言う。
秋留が回復してくれてると思ったけど、どうやら秋留では手に負えない程の傷だったようだ。
ちなみにジェットは聖騎士のため、回復を主とした神聖魔法を唱

える事が出来るのだ。逆に秋留は神聖魔法は唱える事が出来ないため、あまり大掛かりな回復を行う事は出来ない。
「ふうううう。それは良かったですじゃ」
ジェットが肩の力を抜いた。
補足しておくと、神聖魔法を唱えようとした人が顔一杯に汗を滴らせたり、身体から不気味な湯気を発したりすることは勿論ない。
ジェットは死人だ。
神聖という言葉からは大分かけ離れている。
そのせいだろう。ジェットは神聖魔法を唱えようとすると身体が拒否反応を起こす。だから余程の事がない限りはジェットが神聖魔法を唱える事はない。
「あのあと大爆発があって、レッジャーノ邸の庭やら門は全て吹き飛んだわ」
秋留が驚く事をさらりと言う。
ふと気付いて辺りを見渡した。
豪華な調度品があるところを見ると、レッジャーノ邸の専用の病室のようだ。
近くの窓から外を覗くと……確かに庭がほぼ全壊している。
「煙に巻かれている間にガロンとボックス？　には逃げられたわ」
すぐにでも出かけるつもりだろう。秋留が気合を入れて立ち上がった。
「カリューもいつの間にか姿を消していた。今から港に行くよ」
「ああ。海賊共をタコ殴りにしてカリューを正気に戻さないとな」
外の景色から視線を戻して俺も立ち上がる。身体中がまだ痛いが我がままは言ってられない。
「レッド・ツイスターの皆さん」
今まで気付かなかったが、傍にはパルメザンが立っていたようだ。以前怒っていた時とは打って変わって、今は申し訳無さそうに頭を掻いている。
「娘に怒られましてな。洞窟の一件、貴方方が一緒で無かったら確

実に殺されていたと」
俺の疑問に気付いたのかパルメザンが言った。
どうやら少しは扱い易くなったようだ。
「そして今回も人質となった娘を軽んじる事なく、ブレイブさんはクリアを守って下さった」
お！
そうだろう、そうだろう。やっと俺の偉大さが分かったか！
「まぁ、守って当たり前ですが」
俺はウンウンと頷いていた頭をピタシと止めた。パルメザンめ！
大して反省してないんじゃないのか！
秋留が何かを言おうとしている。
そうだ！　文句の一つでも言ってやれ！
「レッジャーノさん」
秋留の鬼気迫る言い方にパルメザンが唾を飲み込んだ。
「お嬢さん、クリオネアさんの魔法の授業の件ですが……」
この時、この場でその話題が出るとは誰もが予想していなかった。
全員がポカンと口を開けていることを気にする素振りも見せずに秋留が続ける。
「どうやら魔法の素質よりも、獣やモンスターとの意思疎通の素質の方があるようです」
秋留がウンウンと頷く。
秋留の台詞はこの病室の外、閉まったドアの外で耳を澄ましているクリアにまで聞こえたことだろう。秋留はクリアが盗み聞きしているのも気付いた上でこの会話をしているに違いない。
秋留に考えがあるなら俺は何も突っ込まずに会話を見守ろう。
「は、はぁ……。動物達と仲良く出来るという事ですか……で？」
確かに「で？」だろうな。
「力を貸してほしいのです」
まさかカリューをコントロールするのに、ちょっと獣やモンスターと意思疎通出来るような小娘の力を借りるのか？

「は？」
確かに「は？」だろうな。
しかし扉の後ろで耳を澄ましていたクリアには通じたのか、病室に黄色い髪を振り乱して秋留の元に飛び込んで来た。
「アタシ、お姉ちゃんの力になりたい！」
「駄目だ！　危険過ぎる！」
パルメザンが秋留の身体からクリアを引き剥がす。
「一緒に行くもん！」
クリアが鬼の形相で父親を睨み付ける。しかし、いくら娘を溺愛しているパルメザンでも冒険者達と一緒に危険な戦地へ行かせるのは許せないようだ。
「駄目だ駄目だ駄目だ」
「行くもん行くもん行くもん！」
低レベルな戦いだ。
しかしこうなる事は分かっていたはずだ。秋留の方を振り向くと、それがまるで合図だったかのように話し始めた。
「レッジャーノさん、この世で一番危険なもの、って何だと考えますか？」
秋留の問いかけに、レッジャーノの口が「駄目だ」の形で止まった。
「そりゃあね、秋留さん」
咳払い一つしてレッジャーノが続ける。
「今日襲ってきたような海賊も十分危険だがね、あいつらも人間だ。言葉が通じる」
あ、こりゃあ、秋留に言いくるめられるな。
俺はこの先の話の展開を予測して一人納得した。
「言葉も通じない獣やモンスター。私にはそれが一番危険だと思っておる。だから危険なモンスターもいる海賊達の元へ娘を連れて行くなど……」
言ってしまったね、パルメザン。

俺は心の中でほくそ笑んだが、この会話の流れだとクリアを一緒に連れて行くという事か？　百害あって一利なしではないのだろうか。
「レッジャーノさん。その一番危険だと思っている獣やモンスターと、お嬢さんは意思疎通が可能なんですよ」

俺達はボロボロになったレッジャーノ邸の庭へとやって来た。
辺りにモンスターや海賊の姿はない。今は港で暴れているらしい。タイガーウォンをはじめとした治安維持協会員達と、戦いを繰り広げているという情報を先程聞いた。
急がなくては。
「ガウガウ！」
レッジャーノ邸の裏から凶暴そうな犬が連れてこられた。ドーベルマンという種類だろうか。首元には棘のたっぷり付いた首輪をつけている。
その凶暴そうな犬を全身を鎧でまとった執事が連れてきた。そんなに危険な犬なのか？
「レッジャーノ家随一の暴れん坊、紅蓮という名のドーベルマンだ」
紅蓮はカリューに負けない程の凶悪さを放っている。その眼は怒りに狂っているようだ。
「うちの娘がこんな獣と意思疎通が出来ると？　秋留さんはそう言っているのですか？」
パルメザンが皮肉たっぷりに言った。
「クリア。私は獣使いじゃないし、獣使いになった事もないから詳しい事は分からないんだけど」
秋留はクリアの高さに視線を合わせて言う。
「洞窟で馬みたいなモンスターに襲われた時、クリア、叫んだよね？」
「……う、うん」
当のクリアは目の前の凶暴そうな紅蓮を見て、明らかに怯えてい

るようだ。大丈夫だろうか。
「クリアの言葉には力があるの。クリアが叫んだ時、洞窟を包囲していたモンスターの動きが全て止まったよね？　獣やモンスター、あそこにいる紅蓮の心に響かせる事が出来る不思議な力が、クリアにはあるのよ」
「う、うん……」
クリアがモジモジとしている。頼りないな。俺に対する態度となぜそんなにも変わってしまうんだ？
「怯えなくて大丈夫よ。クリアのあるがままで、まずは紅蓮の眼を見つめて、問いかけて」
クリアが紅蓮の方を振り向いた。
紅蓮はそんなクリアを睨み返す。
しかしクリアも吹っ切れたのだろう。いや、秋留の力になりたい、という気持ちが勝っているのかもしれない。
クリアが無言で紅蓮に近づく。それに合わせて紅蓮の唸り声が一層大きくなった。
「紅蓮……。初めまして。アタシ、クリア」
「ガウガウ！」
後ろで首輪に繋がった鎖を頑張って引っ張っている鎧姿の執事が、思わず引きずられる程に紅蓮が暴れた。
「ん～。何でそんなに怒ってるの？」
「ガ！　ガウ……」
クリアに問いかけられて紅蓮が思わず動きを止めた。そんな馬鹿な……。あんな凶暴そうな紅蓮を一発で静かにさせた？
俺は今まで獣使いをあまり見たことはないが、意思疎通を計るにはそれなりの時間を要すると聞いた事がある……。
秋留が眼をつけたのは伊達ではなかったということか。これならカリューもどうにかなるかもしれない。
「お姉ちゃん！　紅蓮の気持ちが伝わってくるよ！」
クリアが秋留の方を振り向いて楽しそうに叫んだ。

その言葉にパルメザンも驚いたようだ。
「さすがだね。洞窟を取り囲んでたモンスターの動きを一斉に止めたから、まさかとは思ったけど……」
秋留が感心している。
「うんうん……」
秋留が感心している向こうでクリアが紅蓮と会話しているように見える。やっと言葉の通じる相手に出会えた嬉しさからか、紅蓮が涙を流しながらクリアに「ガウガウ」と言っている。
「え～！　ひっど～い！」
クリアが叫び立ち上がった。
その眼がなぜか父親のパルメザンを睨む。
「ちょっと！　パパ！」
「どきっ！」
パルメザンが分かり易く驚いた。
「紅蓮から話は聞いたよ！　パパ、紅蓮が小さい時に酷い事したでしょ！」
「うわわわわわ！　何の事だ、クリア！　パパは何の事だかさっぱり分からないよう！」
これまた分かり易くパルメザンが慌てる。やたらと声がでかくなったし。
一体、パルメザンは紅蓮に何をしたんだ？
「眉毛書いた」
クリアがボソリと呟いた。確かにそんな悪戯をされている犬を見たことがあるな。
「金太郎印の前掛けを無理やり着させた」
再びクリア。そんな悪戯されている犬は見たことがない。
「無理矢理プードルみたいに毛を剃られた」
さすがにそれは酷い。
威厳のあるドーベルマンも、手足の先だけ毛がある状態だと可哀想にも程があるな。

「すまん！　それ以上は勘弁してくれ！　クリア！　お前から紅蓮に謝ってくれ！」
パルメザンは土下座をして謝っている。
俺達はその後、簡単に準備を整えて港に向かって進み始めた。

「ガウガウ！」
俺達のパーティーにクリアと紅蓮が加わった。紅蓮はクリアの事が気に入ったらしく、傍でクリアに色々と話しかけているようだ。
「あはは！　そんな事があったんだぁ！」
クリアは楽しそうに会話をしている。
勿論、俺達には会話の内容はさっぱり分からない。
「獣使いっていうのは、あんなに普通に動物とかと喋れるものなのか？」
俺は素朴な疑問を口にした。
「う～ん……結構マレなんじゃないかな。そりゃ、クリアの獣使いとして素質は凄いよ。でもあそこまで意思の疎通が可能なのは、むしろ紅蓮の知能が発達しているのが原因だろうね」
確かに。
紅蓮にはゾンビ馬である銀星と同じような雰囲気を感じる。銀星もやたらと知能が高いしなぁ。スケベだし。
「そういえば銀星は元気で過ごしているかのぉ」
ジェットが思い出したように言った。
銀星はこの大陸にある小さめの牧場に預けていた。そこで綺麗な雌馬に恋をしたようだった。あいつも懲りない奴だ。
「それにしても、クリアは結構体力あるよね」
秋留が言った。
確かに。
俺達は今、港に向かって走っているのだ。クリアがいるので全力とはいかないが、それでもクリアは息切れする事もなくついてきている。

紅蓮との会話を楽しんでいるところを見ると、まだまだ余裕がありそうだ。
「しょっちゅう探検ごっことか戦闘ごっことかを、近所の仲の良い友達としてたからかなぁ」
クリアが言った。
それに対して紅蓮が何か相槌を打ったようで、クリアが再び笑う。
何気ない会話をしていた俺達だったが、さすがに人の叫び声や悲鳴が聞こえてきたときには全員の顔が緊張に引きつっていた。
「うあああっ」
近くに街路樹に持たれかかった冒険者が傷口を抑えて呻いていた。
その他にも負傷者があたりに散らばっている。
「やっぱり放っておけないよね」
秋留がキョロキョロとする。
「ジェット、あのベンチでうな垂れている人を先に回復してあげて」
「おお！　あの服装は司祭ですな」
さすが秋留だ。
司祭を先に回復してやれば、その回復した司祭が他の負傷者を助ける事が出来る。
「ブレイブ！　クリア！　行くよ！」
秋留が戦火へと突き進む。
クリアを真ん中にして俺と秋留が左右を固めた陣形だ。
ちなみに硬貨はたんまりと補充してきた。パルメザンに俺の武器は硬貨である事を言ったら、喜んでたんまりと重い銭袋をくれた。
そのせいで若干身体が重いが全然問題ではない。
「レッド・ツイスター！　遅かったじゃないか！」
ボロボロになったタイガーウォンが言った。
それでも致命傷を受けていないあたりが、さすがと言ったところか。
ざっと辺りを見渡したが、海賊の数よりも水系のモンスターの姿が多い。どうやらラムズと合流したようだ。

「ガロンを抑えろ！　あいつが次期の海賊船長になるつもりだ！」
なるほど。
ガロンを抑えておけば、次期船長を置いて逃げるような海賊共はいないだろう。
まぁ、治安維持協会員達が船を取られないように頑張っているのもあるだろうが。
港は既に敵味方が入り乱れていた。これでは秋留が強力な魔法で根こそぎ吹っ飛ばす訳にはいかない。
「海からは水系モンスター、陸からは海賊か……」
辺りを見渡して呟く。
まずはモンスター達を何とかしないといけないな。
「クリア！　いっちょ試してみるか？」
俺はクリアの方を振り向いていった。秋留も「試してごらん」と声をかけている。
「すぅぅぅ……」
クリアが息を大きく吸い込んだ。とりあえず耳を塞いでおこう。
「止まれ！」
塞いでいた手を突き抜けて脳を直接揺さぶるような高い声が響いた。
辺りのモンスターの動きが一斉に止まったが、戦っていた治安維持協会員や他の冒険者の動きまで止まってしまっている。
獣使いの力か？
ただ単に急にデカイ音がしたから、ビックリして全員動きを止めただけではないだろうか。
暫くすると思い出したかのように、そこら中で戦闘が再開された。
「何か微妙だよ」
クリアがショボンとする。
まずはラムズを何とかしよう。俺達はラムズの姿を探した。しかし見つからない。探している間にも俺達の姿に気付いたモンスター達が襲い掛かってくる。

とりあえず近づいてきていた半魚人を倒した。
「ファイヤーバレット！」
秋留も魔法で応戦する。
紅蓮も近づいてきた悪海賊の足首に噛み付いて役に立っている。
クリアは秋留の腰にしがみ付いてビクビクしている。
「これだけ多くのモンスターが操られているからね。近くにいるはずだよ、ラムズは！」
秋留が背中に装備しているマントが鋭い刃物になって、近づいて来たモンスターを八つ裂きにした。
俺は辺りを注意深く見渡した。
あいつは目立たないからなぁ。ガロンは敵に囲まれながらも戦っているのが目立つ。そのすぐ隣にはボックスとか呼ばれていた荷物持ちもいる。
全然見つからない。
俺は諦めかけて視線を海へと移した。
「いた！」
ラムズは海に浮いていた。その足元にはタトールの姿が見える。しかし攻撃が届きそうな距離ではない。
「あそこまで届く魔法もあるけど、簡単に避けられそうだよね」
俺達の存在に気付いたのか、ラムズがニヤリと笑った。
勿論距離があるため、その仕草に気付いたのは俺だけだと思うが……。
ラムズが指を掲げた。
それが合図だったのだろうか。後方から猛獣の雄叫びが聞こえてきた。
「がるるるる……」
カリューだ。
ラムズが俺達のために戦力を温存していたようだ。しかも傷がほとんど塞がっている。カリューが獣へと変化していったプロセスの過程で、自然治癒能力も高くなってしまったのだろう。最早人間だ

ったとは全く思えない。
「ガウガウ！」
紅蓮が吼えるが、カリューの雄叫びによりすっかり戦意を喪失してしまったようだ。紅蓮はクリアの影に隠れた。
カリューが飛び掛かってくる。
俺は両銃のトリガを引いた。弾層には銅硬貨がフルに入っている。
カリューは野生の勘で硬貨を難なくかわすと、俺の両手に食らい付こうとしてきた。
「がるっ」
カリューの腹が裂けて真っ赤な血が辺りに散った。
ブラドーがカリューを攻撃したようだ。しかし体勢を立て直したカリューが今度は秋留の方を睨み付ける。
俺は再び銃のトリガを引く。
次は牽制ではなくカリューの避ける方向を予測して硬貨をぶっ放した。一発は外れたがもう一発はカリューの後ろ足に命中した。
カリューも俺と秋留のラブラブペアには勝てないようだな。
にちゃっとした音が聞こえた。タコの足が秋留の足に絡み付いている。
「ブラドー！」
秋留が叫ぶと、ブラドーが鋭い刃となってタコの足を切り裂いた。
見ると周りにモンスター達が集まってきている。
どうやら戦況が悪くなったとみたラムズが増援を送ってきたようだ。様々な海のモンスターやら水系のモンスターが俺達の周りに集合しつつある。
とりあえずネカーのトリガを引いて、近づいてきていた虹タコの脳天を吹き飛ばした。真っ黒な墨が辺りに散らばり地面を黒く汚した。
「！」
カリューが俺の脚に噛み付いていた。至近距離からネカーをぶっ放したが、長く噛み付いている程馬鹿ではないようだ。発射された

硬貨はあっさりとカリューに避けられ、地面を軽くえぐっただけだった。
「ちっ！　モンスターが増えてきたせいで気配を感じるのが難しくなってきたぞ」
秋留も小さく頷いた。
「どりゃああ！」
ジェットがモンスターを薙ぎ倒しながら俺達に近づこうとするが、数には勝てないようだ。少し離れた場所で必死にレイピアを振るっている。
「またしてもキリがないな！」
目の前まで飛んできた飛魚のようなモンスターを短剣で三枚に下ろした。三枚に下ろしたからといってこの場で食べるつもりではない。
「獣使いっていうのは凄いんだな！」
次に襲ってきた武装した半魚人の首を短剣で切り裂いて叫ぶ。
秋留が首を振りながら反論する。
「有り得ない！　これだけのモンスターを操る能力は普通の獣使いにはないよ」
ナマコのようなモンスターを、魔法の杖で秋留が気持ち悪そうに向こうへ押しやっている。
「ぐうっ！」
強烈な一撃を短剣で弾く。手が痺れて感覚がなくなった。
この強烈な攻撃はカリューか！
あの野郎、雑魚の攻撃に混じって巧みに攻撃してきやがる！　ラムズがいるとこんなにも変わるものか？
「そういえばっ」
飛んできた黒い銛を咄嗟に掴む。下手に避けると俺と秋留の真ん中で震えているクリアに当たりかねないからな。
「ラムズが牢屋に閉じ込められている時も、モンスターが操られている風じゃなかったか？」

今度は膝蹴りで近づいて来たカリューを弾き返す。
俺の膝や肘には鉄板が入っているため威力はそれなりのものだ。
「あ……」
秋留が俺の台詞に一瞬硬直する。
「危ない！」
俺はネカーをぶっ放して秋留に攻撃を仕掛けてきた貝殻のようなモンスターを吹き飛ばした。
「ぼ～っとしたら危ないって！」
「そっか……」
再び近づいて来たナメクジのようなモンスターはブラドーが薙ぎ払う。
「タトールがモンスターを操っているんだ！」
「え？」
俺が一瞬硬直したスキに魚モンスターが殴ってきた。俺は額を押さえながら魚モンスターをネマーで木っ端微塵にする。
「いてて……。どういう事だ？　ラムズは獣使いじゃないって事か？」
「大地の精霊と風の精霊の宴は地底を走り虚空を舞う！」
秋留は三日月の飾りが付いた魔法の杖を上空に振り上げる。俺はその間に秋留を襲ってこようとしているモンスターを打ち倒してフォローする。どうやら魔力を高めているらしい。溜めが長い。
「アースブロー！」
秋留が力を込めて叫ぶ。
丁度モンスターが固まっていた場所で大地を風が爆裂し、モンスター達を吹き飛ばした。その中にカリューも混じっていたようだが、まぁ無事だろう。
「ふぅ。これで少しは時間が稼げるかな」
俺は魔法の効力とは反対側にいたモンスター数匹をネカーとネマーで倒す。
「ラムズは確かに獣使いよ。でも、襲ってきている水系モンスター

を操っているのはタトール……」
「モンスターがモンスターを操るなんて出来るのか？」
俺達は敵が少なくなって来たのをチャンスとみて海へ近づいた。
つまりラムズへと。
「う～ん。もしかしたら、力のあるモンスターの命令を弱いモンスターが聞くとかあるかもしれないけど、タトールはモンスターじゃなかったんだよ」
俺達は尚もラムズへと近づく。
ちなみに少し離れた浜辺ではガロンと治安維持協会員達が戦闘を繰り広げているが、その輪の中にジェットの姿も見える。
いつの間にか戦闘に加わったようだが、身体中に穴やら取れかけそうな腕を振り回して戦っているジェットの姿に、周りの協会員達がビビッている。
「タトールは霊獣だよ」
「召喚魔法で出てくる、あの霊獣？」
怯えていたクリアが聞いてくる。自分が知っている単語が出てきたので、デシャばりたくなったらしい。
「そうだよ、クリア。でも本来、霊獣っていうのは特定の場所でしか生きられないの」
へ～。
秋留は物知りだなぁ。何でも知らないと気が済まない気質なんだろうな。感心してしまう。
「だから霊獣は召喚士に呼ばれた時だけ別の場所に姿を現すの。長い事その場に留まるのは無理なはずなの」
秋留の講義が続く。
その間にも襲い掛かってくるモンスター達は、ボディーガードである俺がぶち殺す。
「私がよくお世話になっているジャイアントロックは、普段は岩山に住んでいるしね」
俺のイメージではジャイアントロックは普段は体育座りをしてい

そうだ。
そんな馬鹿な事を考えながらも、俺達はどんどん海に近づいていっている。海に近づいたところでラムズやタトールまでは攻撃が届かないが、どうするつもりだろう。
「で、タトールの話に戻るけど、タトールは私の予想が正しければ……」
ここで秋留がビシッと海の上のタトールを指差す。
「霊獣の中でも有名な『四聖』のうちの一匹『玄武』よ！」
秋留の台詞が聞こえたのか、海の向こうにいるラムズがニヤける。
そしてタトールが反応したかのように、波が一瞬高くなった。
「水を操る力のある玄武だからこそ、水系のモンスターをこんなに沢山操れるんだよ」
なるほど。
タトールはそんなに有名な奴だったか。それを操っているラムズはそれなりに力のある獣使いという事か。
「何で玄武なんていう有名な霊獣が、ラムズなんていうショボい奴にくっついているのかは不思議だけどね」
秋留の考えと俺の考えは大分違うようだ。
「力があるし海の上だから、場所を移動したり、ある程度なら陸地でも生きていられるんだね？」
クリアが言った。
ああ、そういう台詞を言うのは俺の役目じゃないのか～？
「ふふ。そうだね。クリアは物分りが良いね～」
秋留がクリアの頭を撫でる。
ああ！　俺がクリアの言った台詞を言っていれば、秋留は俺の頭をナデナデしてくれるはずだったのにぃ！
「ナデナデなんかしないよ」
久しぶりに秋留に心の中を読まれてしまったようだ。
「で？　どうするんだ？」
俺の素朴な疑問。

既に俺達は脚に波がかかる場所に立っている。
と、突然、目の前の波間から人魚が現れた。濡れた金髪が色っぽい。人魚の上半身は裸だ。俺は眼のやり場に困った。
「荒れ狂う空を縦横無尽に闊歩する雷帝ヴォルトよ……」
秋留は人っぽいモンスターでも容赦なく攻撃を仕掛ける。
俺は少しでも人っぽいとモンスター相手でも躊躇してしまうのだ。
「待って！」
急にクリアが秋留の前に飛び出してきた。
「この子の心が伝わってきた！」
クリアが人魚に近づいていった。いくら人の形をしていてもモンスターには違いない。その証拠に水で出来たナイフを右手に持っているのが見える。
武器を構えた俺を秋留が制止する。
「ちょっと待ってみようか。いつでも攻撃出来るようにはしといて」
俺は両手に武器を構えて成り行きは見守った。照準は人魚モンスターの心臓……うう、なぜか照れる。
「人魚さん、無理矢理戦わされているんでしょ？」
人魚モンスターが不気味な呻き声を上げた。今にも飛び掛ってきそうだが大丈夫だろうか。
「酷い……心が鎖でがんじがらめにされているみたい」
クリアが悲しそうな顔をした。
「すぅぅぅぅ……」
また大声を出すつもりらしい。
俺は両耳を塞いだ。隣で秋留も同じ仕草をしている。可愛い。
「玄武ぅぅぅぅぅぅ〜！」
空気が揺れた。秋留が魔法を放つ時と同じような空気の振動だ。
その叫び声に海の向こうに立っていたラムズとタトールが硬直する。と同時に目の前の人魚が呪縛から解き放たれたかのように海に戻っていった。
俺は静かに両銃をホルスターに戻した。

目の前でクリアが人魚を解放した事でラムズは焦ったようだ。俺達の方に少し近づいて来た。
すると目の前から今度は半魚人がザバッと五匹現れた。タトールが呼んだのだろう。
「あんた達！」
クリアが半魚人達に叫ぶ。
「何であんな亀なんかの下で働いているの！　どこが良いの！」
いや、何か理由があるんだろ？　何せ相手は水を操る力のある霊獣だからな。
「アタシの下で働け！　きっちり調教して、あ・げ・る・よ！」
クリアの猛烈なアピールで半魚人達が一歩後ろに下がった。
これで鞭でも持たせればクリアはどんなモンスターでも操れるんじゃないだろうか？
「こら！　逃げんな！　半魚人共！」
半魚人達は逃げ出した。
クリアには逃げた理由が分からないらしく、プンプンと湯気を出しながら怒っている。
「クリアは優しく語りかけるよりは、力で押さえつけて操るタイプみたいだね」
秋留が言った。
確かに、明らかにラムズとは獣使いとしてのタイプが違うようだ。
クリアに半魚人達を解放されたラムズとタトールは更に俺達に近づいて来た。このまま行くと攻撃が届く範囲まで来るんじゃないのか？
「ぷしゃあああ」
今度は割と近くの海から水が噴出した。何だ？
「いつまでも調子に乗るなよ」
ギリギリのレベルでラムズの声が聞こえてきた。つまりラムズ達が大分近づいて来たという事だ。
先程、水を噴出した物体が俺達の眼の前から現れた。

クジラ。しかもキャタピラが付いている。
「クジラ戦車！」
秋留が叫んだ。戦車？　確かワグレスク大陸で魔力で動く荷馬車のようなものがあると聞いていたが、その名前が確か戦車だったはず……。
「デカイわね！」
クリアも叫んだ。
それをモンスターに問いかけているのだとしたら、そのまんまだけどな。
確かに大きい。俺の身長の三倍はありそうだ。
その巨大なクジラ戦車の口が大きく開く。口の中に巨大な一本の銃身が見えた。
「危ない！」
俺は秋留とクリアの前に飛び出した。身長程ある銃身から飛び出してくる砲弾を防ぎきれるとは思えないが……。
「口臭いわよ！」
クリアがまた叫ぶ。確かに臭い。秋留とクリアの前に出たせいで、クジラ戦車のデカイ口が目の前にあるから余計に臭う。これは生ゴミの匂いだ。それも何日も放っておいた生ゴミ……。
俺達が同じ事を叫んでもクジラ戦車には伝わらなかっただろう。
しかし意思疎通がある程度可能なクリアの叫びは、クジラ戦車にダイレクトに伝わったようだ。
遥か頭上に見える小さな眼から大粒の涙を流しながら、クジラ戦車は海へと戻っていった。
「ちょっと可哀想かも」
秋留が呟いた。
俺は海上を眺めた。もう目の前にタトールに乗ったラムズがいる。
と、海水が盛り上がり俺達に向かってきた。
俺達は勢いよく流される。
「しょっぱ～い！」

クリアが叫ぶ。さっきから叫んでばかりだが喉は大丈夫だろうか。
それにしても、とうとうタトールとラムズが直接襲ってきた。
「キーーーー！」
ガラスを爪で擦った時のような不快な音。タトールが声を発しているようだ。亀の鳴き声ってこんなだったのか、と感心している場合ではない。
タトールの周囲に氷の槍が無数に出現した。
「業火の身体を持ち　煉獄の心を抱く者よ……」
秋留が呪文を唱え始めた。
……この魔法は広範囲に熱風を飛ばす極大魔法だ。タトールとラムズしかいない海に向かっての攻撃なら問題ないだろう。
俺はネカーとネマーでタトールとラムズを攻撃した。
しかし宙に浮かんだ氷の槍が硬貨を吹き飛ばす。それなりの硬度があるらしい。
「ちょっと止めなさいよ！」
クリアが叫ぶと氷の槍が一気に減った。俺の硬貨より威力があるという事か。さすがにショックだ。
「灼熱の息吹を知らぬ哀れな者達を汝の舞で焼き崩せ！」
秋留が杖を振りかぶる。
それと同時にタトールが氷の槍を全て飛ばしてきた。間に合うか？
「コロナバーニング！」
顔を覆いたくなるような熱風が辺りを包む。
クリアも悲鳴を上げた。
「キーー！」
タトールも悲鳴を上げた。タトールの放った氷の槍は跡形も無く溶けて消えた。
「助けて！　タトール！」
まさに熱風がラムズとタトールを襲う瞬間、ラムズがタトールに助けを求める。いや、タトールも自分の命を守るので精一杯じゃないのか？

「キィ！」
タトールがラムズの前へと出た。ちなみにラムズがいる場所は海に入ってはいるが足が届く位置らしい。腰の位置で波間に漂っている。
辺りが水蒸気に包まれた。
タトールが熱風を食らう直前に海水を壁のように打ち上げたのが見えた。しかし、このままではタトールとラムズがどうなったのか分からない。
「防がれちゃったか」
秋留が残念そうに言った。
「コロナバーニングとかの大規模な魔法は結構な魔力を使うから、私は暫く役に立てないよ」
俺の方を見て秋留が言う。
つまり今のでラムズとタトールは片付けたかったという事か。俺は両銃を構えた。
「お姉ちゃんって凄いんだね」
クリアがケホケホと水蒸気に蒸せながら感心している。
「がるるるる」
何か考える前に獣の唸り声に身体が動いた。
後方に向かってネカーとネマーを発射する。当たらなかったが牽制にはなったようだ。
飛び掛ろうとしていたカリューが体勢を立て直している。
「危なかった……」
身体から若干の煙を上げたラムズが言った。
「タトールが俺の身体ごと上空に打ち上げてくれていなかったら、再起不能になっていたところだ」
「ちっ！」
カリューのすぐ傍にラムズがいる。という事は今のカリューは完璧にラムズに操られているという事になる。
「行け！　カリュー！」

ラムズの号令を合図にカリューが飛び掛っている。下手に避けたりすると秋留やクリアが危ない。
俺はカリューに向かって飛び出した。
まずは左手のネカーを一発。そして右手のネマーを少し照準をずらして一発。
「ガウッ」
カリューが器用に身体を折り曲げて避ける。俺はその間に更に二発の硬貨を発射した。
「ガウガウッ」
最小限の動きでカリューが硬貨を避ける。そろそろ俺の攻撃に慣れてきたのか！　カリューの戦闘能力は厄介な事この上ない。
手を伸ばせば届く距離になったところで俺は右手を黒い短剣へと持ち替えた。まずは牽制のためにネカーを発射する。
牽制で放った硬貨はカリューの爪に見事に弾かれた。
俺は目の前にまで接近してきたカリューに漆黒の短剣を投げる。
「ガウッ」
カリューの身体の中心を外れた短剣は遥か後方へと飛んでいった。
そう、俺の予想通り。
「うわあああ！　カ、カリュー！　俺を助けろ！」
俺が狙ったのはラムズだ。もうラムズの目の前まで俺の投げた短剣が迫っている。
間に合わないよ。しかも……。
俺は心の中で微笑んだ。
ラムズの命令に従ってカリューが後ろを振り返った。俺はネカーを後頭部に叩き込んだ。
「ガッ！」
至近距離からの硬貨がぶち当たったカリューの短い呻き。血が吹き出た。
「ぎゃああ！」
俺の投げた短剣が肩口に刺ささり、ラムズが悲鳴を上げた。

ラムズとカリューのペアと戦闘を始めて一瞬。その一瞬でケリがついた。
「ラムズ、お前は操る獣やモンスターを頼りすぎなんだよ」
痛みに地面を転げまわるラムズに近づきつつ言う。必死に肩口を押さえているようだ。
「ひいいいい！　力が抜ける！　早く助けて！」
見ると俺が投げつけた短剣がかなり深いところまで突き刺さっている。あの距離から投げてそんなに深いところまで突き刺さったか。
俺はラムズの右肩に刺さっている短剣を握った。
そしてワザと短剣をグリグリと回すようにしながら、ラムズの肩から抜く。
あれ？　静かになったな。
ラムズを見下ろすと涙を流して気絶していた。その顔がゲッソリとしている。
「さっすが、ブレイブ。よく一瞬で片付けたね」
「まぁね。たまには頼れるブレイブを演出しないと秋留に嫌われるだろ？」
滅多にない秋留の褒め台詞に照れた俺はわざとオドケて答える。
「まるで今は私に好かれているみたいな言い方だね」
カリューやラムズの攻撃よりも致命的なダメージを受けたぞ、今の台詞は。
「あはは！　ブレイブ、顔が死んでるよ！」
クリアが俺の顔を指して豪快に笑っている。ことごとく失礼な奴だ。
「さて、ガロンはどうかな」
見るとさすがに数に圧倒されたのか、ガロンが多数の治安維持協会員の放ったロープにガンジガラメにされている。
不死身のジェットと死闘を繰り広げたのだろう。
ガロンは身体中に穴が開いたり手足が取れかかっても平然と立っているジェットを恐怖の眼差しで見つめている。

死闘……。
まぁ、今のジェットには縁のない言葉だったか。
ボックスとかいう奴は力尽きて地面に突っ伏している。あいつはただの荷物持ちっぽかったからな。
「終わったか」
俺は再び暴れる事がないようにカリューを縛ろうと近づいた。前よりも念入りに縛らないとな。
「え？」
俺の胸、心臓がある位置にカリューの爪が突き刺さっていた。咄嗟に急所はズラしたつもりだが、この傷の深さは危険だ。
「きゃあああ！　ブレイブ！」
失いそうな意識の中で秋留の悲鳴が聞こえた。
駄目だ、今、気を失ったら魔力の尽きている秋留も無防備なクリアも危ない。
「だあああ！」
カリューを縛ろうとしていたために銃も短剣も構えていない。
俺は右拳に力を入れて目の前にあったカリューの眉間を殴りつけた。
「！」
俺の全身に鈍い音が反響した。やはり盗賊の俺の腕では直接攻撃には無理があったようだ。右拳の感覚が途端に無くなる。
しかし、その痛みのお陰で意識がはっきりした。
カリューも軽い脳震盪を起こしているようで追撃が来ない。追撃とはつまり、喉を噛み切りに来たり、頭を砕きに来たりだ。
「カリュー！　ブレイブは仲間だろぉがぁ！」
クリアが叫んだ。まるでイカつい野郎が叫んだような言い回しだが、突っ込んでいる場合ではない。
あれ？
クリアにカリューが仲間である事なんて言ったっけか？　まぁ、今までのやり取り等を見ていれば、予想が付くか。

とにかく、クリアの叫びでカリューがピクリと耳を動かした。
「ジェット！」
秋留がジェットを呼ぶ声が聞こえた。今では頭を動かす事も出来ない。どうやら俺は地面に倒れているようだ。
バシンッ！
視界が大分狭く、そしてボヤけてきたがクリアがカリューの顔を平手打ちしたのが見えた。
「いつまで操られているの！　秋留お姉ちゃんやブレイブはお前の大事なご主人様だろ！」
う～ん。
さすがに全てを理解している訳では無さそうだ。そいつは俺達のペットじゃないぞ……。
「う！　これはいけませんな」
ジェットが俺を見下ろしているようだ。なぜか死神に見えるのは身体中からダークなオーラを発しているせいだろうか。それともジェットの傷口がみるみるうちに修復していっているからだろうか。
「全てを優しく包み込む大いなる力よ、その神をも癒す聖なる泉を我が眼前に出現させたまえ、セクアナの泉！」
目の前が真っ白になった。
そして一瞬にして身体に力がみなぎる。俺は内から溢れ出るパワーに押し出されるように勢いよく起き上がった。
「ありがとう！　ジェット！　何だか前より大分調子が良くなったよ！」
腕をブンブンと振り回しながらジェットの方を向いた。
あれ？　さっきまでジェットがいた場所には誰もいない。
「セクアナの泉……神聖魔法の中でも上位に位置する回復魔法だよ」
秋留が涙を流している。
ま、まさか。
ジェット……。命と引き換えに俺の事を助けてくれたのか？
「ジェット、今までありがとう……」

秋留が俺に背を向けて天を仰いだ。
駄目だ、俺まで泣きそうになってきた。
目の前の秋留の背中がプルプルと震えている。俺は何て事をしてしまったのだろう。
今まで固定的なパーティーなど組んだことが無かった。ここまで気の合うメンバーとパーティーを組めた事を幸せに思っていた。それを……俺は……。
「あ、あ……」
秋留が嗚咽も漏らす。
「あっは……」
ん？
「ああ～っはっは！　あはは～！」
秋留が笑い出した。
まさか……。
「ブレイブ、涙目になってる！　ジェットは大丈夫だよ！　暫くは原型を保てないけど暫くしたらまた復活するよ。あっはっは～！」
騙された。
俺とした事が今までのジェットの記憶を走馬灯のように映し出してしまっていた。死人ジェットの命と引き換えに復活させて貰った、などと思った自分を呪う。
「酷いじゃんか！　秋留！　俺はジェットが昇天したかと本気で心配したんだぞ！」
秋留が笑い涙を拭きながら、少し真剣な顔で口を開いた。
「私を本気で心配させた罰だよ」
「！　心配してくれたのか？」
俺はすっかり気分をよくした。
何か秋留が俺に対して酷い事を言って弁解しているようだが、俺の耳には聞こえない。都合の良い事だけを脳みそに刻んでおこう。
「それにしても」
俺は辺りを見渡した。

傷付いた者や死亡している者も数多く見られる。海賊団には苦労させられた……。いや、ここまで苦労したのはあそこでクリアに調教され始めているカリューのせいだろう。
凶暴だったカリューもクリアに怒鳴られながら「お手」や「おかわり」を覚えさせられている。獣使いって凄いんだなぁ。
カリューの眼がクリアの迫力により怯えているよう見えるが、まぁ、俺を殺そうとした罰だな。
「お疲れだったな」
タイガーウォンが近づいて来た。身体中傷だらけだが致命傷は追っていないようだ。カリューやガロンと戦って五体満足とは、実は結構強い奴なのかもしれない。
いや、ただ頑丈なだけか。
「助かった。いくらカリューに手助けされたからといって、海賊達を逃がしたのは治安維持局側の落ち度だ」
傲慢そうな奴に見えたが、それ程、話の分からない奴でも無さそうだ。
「ラムズにカリューが操られるのを予測出来ずに、近くの檻に閉じ込めたのが不味かったな」
アゴに豪快に生えた真っ黒なヒゲをもてあましてタイガーウォンが笑った。
いや、笑い事か？
「カリューか……どうするかな……」
タイガーウォンが悩む。
我がパーティーの頭脳、秋留が黙っている。何か良い案を考えている最中に違いない。
「ペットは責任を持って飼い主が面倒を見ます」
秋留がタイガーウォンを見つめる。
「ペット……ペットか！　そりゃ良い！」
タイガーウォンがクリアに叩かれているカリューを見て更に笑う。
「確かにペットだ！　がっはっは！」

とりあえず当初の予定通り、行儀の悪いペットと成り果てたカリューを元に戻してもらうために、アステカ大陸に行くしかない。この大陸に来た時とはカリューの状態が大分変わってしまったが大丈夫だろうか。
道中で誰がご主人様かはっきりさせてやらないとな。
……。
今はクリアがカリューのご主人様と認めざるを得ないようだが。
「！」
俺は大気が震えるのを感じて辺りを見回した。
一瞬、身体ごと海水に流された俺の視界に映ったのは、ラムズとガロンの傍にたたずむ焼け焦げたタトールの姿だった。
「助かったぞ、タトール！」
ラムズがボロボロのタトールを撫でた。
そして幹部二人が走り出す。
「炎の精霊イフリートよ、炎の弾丸で敵を撃ち抜け！　ファイヤーバレット！」
秋留が咄嗟に魔法を放つ。
しかし逃げる海賊達には命中しなかった。
「あの森に誘導して」
秋留が小声で俺に呟いた。秋留の視線の先には俺達が取り付かれた不気味な森が鎮座している。
秋留に何か考えがあるのだろう。
俺はネカーとネマーでラムズとガロンの少し右を狙った。
「うがっ」
俺の狙い通り、放った硬貨がガロンの右腕をかすった。海賊達は順調に森へと誘導されていく。
「タトール！」
腹に響く重低音な声。
タトールを呼んだのはラムズではない。クリアだ。
クリアの叫び声にタトールの動きが止まった。

「どうした、タトール！　ここから逃げて体勢を立て直すぞ！」
次はラムズの叫び声。
しかしタトールはその場を動こうとしない。
「タトール……」
先程の響いた声とは違って優しく訴えかけるようなクリアの声。
これがあの有名な飴と鞭か。
「ラムズなんかに付いて行ったら命がいくつあっても足りないよ」
クリアがタトールをはじめとした海賊達に近づいていく。
俺はいつ海賊達が反撃してきても良いようにネカーとネマーを構えなおす。
「タトール、構うな！」
ガロンに追いつくようにラムズも走り出しながら叫ぶ。
「アタシなら！　アタシならタトールを危険に合わせる様な事はしない！」
クリアのこの台詞がトドメを刺したようだ。タトールがクリアへヨロヨロと近づいてくる。
「タトール！」
森へと消えていくラムズの悲痛な叫び。まるで恋人に裏切られたかのような悲しさを感じる。
そしてタトールがクリアの胸へと飛び込んだ。
「よしよし」
クリアがタトールの頭を優しく撫でる。しかしタトールは気付いていない。クリアの顔が新たな下僕を手に入れた邪悪な笑みに包まれているのを。
「カリュー」
クリアの死角に入って逃げようとしていたカリューが、クリアの静かな声にビクリと身体を震わせて立ち止まった。そして大人しくクリアの傍に近づいていく。
獣使いクリア。
既に紅蓮、カリュー、タトールという強力な軍団を引き連れるま

でに成長してしまった。
「凄い成長の早さだよね」
秋留が言った。
「なぁ、ラムズとガロンは追わなくて良いのか？」
タイガーウォン達治安維持協会のメンバーも、不気味な森に入ることを躊躇しているようだ。
「大丈夫、彼らにお願いしておいたから」
「彼ら？」
秋留に聞き返したが秋留は不気味に笑っただけだった。
「クリア、凄いわね。もう獣を三匹も仲間にしちゃって」
秋留がクリアの視線に屈んで話しかける。目線を同じにして話しかけている秋留の心遣いはさすがだと思う。
「うん！　皆、私とずっと一緒にいたいって言ってる！」
クリアが紅蓮を、カリューを、タトールを順番に撫でた。
俺の眼には全ての獣が首を横に振っているように見えるのは気のせいだろうか。最初は忠実だった紅蓮も一連のやり取りを見て考え方を変えたようだ。
その時だった。
俺の耳に森の奥深くからラムズとガロンの叫び声が聞こえてきたのは。
「聞こえた？」
森を眺めている俺の隣にやってきて秋留が言った。
頷く俺に秋留は続ける。
「森にいたカップルの霊に言ってあげたの」
霊と会話？
ネクロマンサーはそんな事も出来るのか。便利なもんだなぁ。
「何て言ったんだ？」
ふふ、と笑って秋留が言った。
「ガロンとラムズはデキてる！」

それから暫くは海岸の生存者達の介抱を行った。俺達冒険者は簡単な治療の仕方なら知っている。
「こりゃこりゃ、大変そうですね」
森の方から頭を光らせながら一人の爺さんが近づいて来た。俺と秋留が取り憑かれた時に助けてくれた、ツルッパゲのゲーンとかいう爺さんだったかな。
「わたくし、神聖魔法が少し使えますゆえ、お手伝いしましょうかな」
「お前の助けなどいらん！」
近づいて来たタイガーウォンがゲーンを指差して怒鳴る。
ムッとした顔をしてゲーンが言い返す。
「そんなボロボロの身体をして何を言うか！」
この爺さんズはお互い面識があるようだ。しかも仲が悪そうに見える。
今にも殴り合いの喧嘩を始めそうな雰囲気だ。
「お前の方こそ何もしていないのに身体がヨボヨボではないか！」
これはタイガーウォン。
今までは威厳のあるように見えていたのだが、こうやって口論しているところを見るとタダのジジイだな。
「お主こそ、その顔の恥ずかしい傷はいつ消えるんだ！」
「何だと！」
「そんな凶暴な顔で捨て猫を助けようとするから豪快に引っかかれるんだ！」
ぷっ。
思わず噴出してしまった。あの顔で捨て猫を助けるような心を持っているとは。顔を斜めに横断する真っ赤な傷は子猫につけられた傷だったのか。
「まぁまぁ、お二方、仲良くしましょうよ」
秋留が間に割って入った。相手の心を静めるように優しく話しかけているのが分かる。

「こんな奴と仲良く出来るか！」
タイガーウォンがゲーンの顔に唾を飛ばしながら反論した。
「汚なっ！　貴様！　唾を飛ばすな、臭い！」
これはゲーンの台詞だ。まるで子供の口喧嘩だ。
「亡くなったお二人は、貴方達二人が仲良くなる事を望んでいますよ」
秋留は二人の爺さんの秘密を知っているらしい。
秋留の台詞を聞いたタイガーウォンとゲーンは、お互いを見つめ合ってソッポを向いた。
「とりあえず口論している場合ではないな。重症者から面倒を見よう」
ゲーンが白い法衣の袖をまくって負傷者の手当てをし始める。
「よろしく頼むぞ」
タイガーウォンは、心配そうに成り行きを見守っていた治安維持協会員達の元に戻って、色々と指示し始めた。
秋留の言葉で全てがまるく収まったようだ。
「どういう事だ？」
俺は秋留に近づいて聞いた。
「森のカップルの霊ね……両親に反対されて投身自殺しちゃったんだけど」
秋留が少し怒るような目線を二人の爺さんに送る。
「その仲の悪い両親がタイガーウォンとゲーンなの」
「！」
そんな事実があったのか。それでゲーンは二人の霊を慰めるために森で暮らしているという訳か。
「そんな情報どこで仕入れたんだ？」
何となく予想はしていたが、とりあえず秋留に聞いてみた。
「本人達の霊に直接」
やっぱり。
悩み相談でもしてあげたのだろうか。それでこうなるかもしれな

い事を予想してガロンとラムズがデキているという情報を伝えた……。

「やっぱり秋留は天才だよ」

「当たり前でしょ」

秋留が笑顔で答えた。そういうフザけた態度も俺は大好きだ。

エピローグ

「それじゃあ、ちょっと行ってくるね」
クリアが父であるパルメザンに手を振っている。
「くれぐれも気をつけるんだよ」
パルメザンが涙を流してオロオロしている。右手に持ったハンカチも風にオロオロと揺れているようだ。
ここはレッジャーノ邸の庭。さすが金持ちなだけあって庭がほとんど修繕されている。今は色々事件があった翌日の昼間だから修繕させる時間なんてほとんど無かったはずなんだけどな。
あれから俺達は負傷者の手当てを終えて、クタクタになって宿屋に戻った。そして翌早朝から治安維持協会への出頭、書類手続き、カリューに関する誓約書の記述……。
カリューは治安維持協会の人間を殺めてしまったが、そこはラムズに操られていたと言う事で無罪放免となった。
治安維持協会での手続きを終わらせた俺達は、レッジャーノ邸へとやって来た。昨日預けたカリューを引き取りに来たのだが……。
「どういう事かしら？」
秋留も俺の隣で呆けている。
俺達は目の前で父親に別れの挨拶をしているクリアと、それに従う四匹の獣を見つめた。
そう。四匹。
赤黒い毛並みを光らせた紅蓮。
青い毛並みが風に揺れるカリュー。
改めてみると普通の亀の甲羅よりも黒い色の甲羅を背負ったタトール。
そして、自分の身体より大きな荷物を背負ったシープット。
俺の視線に気付いたのかシープットが執事らしい控えめな会釈をしてくる。

「どうも」
俺達三人と一匹、久しぶりに銀星も俺達に付いてきているのだが、シープットの会釈に合わせて頷いた。
「何が起きているの？」
秋留が小声でシープットに聞く。
「え？　聞いていませんか？　お嬢様が貴方達のメンバーに加わるとか……」
『えーーーーー！』
俺達は叫んだ。
その叫び声でようやく俺達の存在を思い出したらしいパルメザンとクリアが、仲良く近づいてくる。
「よろしくお願いしますな」
パルメザンがバンバンと秋留の肩を叩く。痛そうに顔を歪ませて秋留が話し掛けようとするが、クリアが勝手に話し始める。
「お姉ちゃんと冒険が出来る～！」
秋留の口が「あ」や「う」を発し続ける。言葉にならないようだ。
「どういう事ですかな？　イマイチ、理解出来ないのですが……」
俺達の保護者役でもあるジェットが、秋留の代わりに話をした。
「ペットのカリューが大人しくなるまで、アタシがお姉ちゃん達について行ってあげる！」
そう来たか。
秋留がようやく心を取り戻したのか、ジェットの前に出て話し始めた。
「レッジャーノさん、この島で発生した事件とは比べ物にはならない程の危険が、これから行く大陸には待っているかもしれないのです」
秋留はパルメザンに言ったが首を振るだけだった。
「クリオネアは言ったら聞かない娘でして……」
パルメザンが頭を掻いて続ける。
「まぁ、それでもかの有名なレッド・ツイスターさんのパーティー

に加えてもらえるなら、私も安心ですよ」
金持ちときたら、こちらの都合等ほとんど考えてくれていない。
この先はアステカ大陸。俺は行った事がない大陸だ。どんな危険が待っているのか分からない。そんな中で自分の身も守れないような初心者を連れて行くなど……。
「安心して下さい、クリオネアの宿代等を含めて一千万カリムを貴方達にお渡しします」
「任せて……むぐぅ」
俺が一千万カリムの入った銭袋を受け取ろうとしたところで、秋留に口を押さえられた。ああ、秋留の手の良い匂いが……。
はっ！
これはさすがに変態だから止めておこう。俺は秋留の眼を見て後方に、銭袋から少し離れた。
「危険過ぎます。これから向かうアステカ大陸には、何が待っているのか分からないのですから！」
「ふむ……」
秋留の説得にパルメザンが悩む。
しかし昨夜はクリアに散々説得されたのだろう。今もクリアの痛い視線がパルメザンに刺さっているのもあるかもしれないが、パルメザンは諦めない。
「万が一、何かがあっても貴方達には一切の責任はありません」
パルメザンは力強く頷く。
「貴方達が直接クリオネアに何かをする訳ではないですしな」
そこは念を押すように俺達を睨み付ける。
俺に対してだけやたらと視線が止まるのが長い気がするのは、気のせいだろうか。
「何かがあったら、その時は私の全財力をもってクリオネアを傷つけた者を打ち滅ぼします！」
そこでパルメザンは握りこぶしを作る。
「はぁ、レッジャーノさん、それでも……」

秋留もそう簡単には説得に負けない。
しかし反論のスキも与えずにパルメザンが続ける。
「いやいや、もう決めました！　それに……」
パルメザンが嫌らしい眼つきで俺達を眺め回す。こいつ、何か切り札を用意してやがったな！
「聞けば、ペットのカリューの暴走を直すためにも早くアステカ大陸を目指したいとか？」
「う……」
思わず秋留の反論も止まる。そこを突かれると痛いんだよな。
「それにですね」
そう言ってパルメザンはシープットを指差した。
「忠実な僕も付けましたから」
いやぁ。
それを説得の最後に持ってこられても困るなぁ。逆にシープットはいらないけど。その気持ちは秋留も一緒らしく苦笑いを浮かべている。
「お姉ちゃん！」
クリアが秋留の腰に飛び込んだ。
一緒に行くとなると、こんな羨ましい光景を毎日のように見なければならないのだろうか？　想像しただけでも生き地獄だ……。
「アタシが一緒に行った方がカリューが大人しくなるよ」
ギラリッとクリアの鬼のような視線がカリューに向けられた。カリューが耳を垂らして怯えているのが分かる。確かに大人しい。
「う～ん……そうなんだよねぇ」
秋留の気持ちがとうとう折れた。実はクリアも言葉巧みな方なのかもしれない。これから被害に合う獣が続出しそうだ。「クリア討伐組合」なんていう組織が獣の間で広がったらどうするつもりだ。
「心配ならもう一千万カリム上乗せしますよ？」
「任せて……むぐぅ」
俺が両手で一千万カリムが入った銭袋を二つとも受け取ろうとし

たところで、またしても秋留に止められた。
「分かりました。冒険者として護衛の依頼も数多くこなして来ました。お嬢さんは必ずお守りします」
秋留がパルメザンの前で肩膝をついて依頼を受けた。
これで暫くは俺達のパーティーにクリアを含めて獣が四匹追加される事になった。
それにしても……。
もう全部で二千万カリムか。下手な依頼よりも余程報酬が良い。俺が最初の一千万カリムを受け取っていたら増えなかったかもしれない。もしかしたら秋留はそれを予想して俺の行動を止めたのか？
「まとまったようですね。それでは我がレッジャーノ家自慢の船へとご案内しましょう」

俺達は港へとやって来た。その道すがら、たまたま子供と散歩していた商人夫婦に挨拶をした。この商人夫婦にはデズリーアイランドに来るまで世話になった。
カリューのことを簡単に説明し、アステカ大陸まで別の船で移動する事を告げた。
アステカ大陸に行く航路に出ると言う海賊から船を守るのが契約だったので、その心配のない今となっては商人夫婦の船を下りることに何の問題もない。
「ジェット・レッジャーノ号です」
港の桟橋で俺達は一隻の船を紹介された。
「ワグレスク大陸産の最新鋭の魔動船です。商人仲間に頼んでこっそり手に入れさせたんです。あそこは物の輸出にはうるさいからな！」
手で口を遮って内緒話を装っているがパルメザンの声はデカイので丸聞こえだ。自慢したいんだろうな。
魔動船といえば、デズリーアイランドに来るまでに乗せてもらっていた船も魔動船だったが、船の大きさはレッジャーノ号の方がだ

いぶ小さい。
この船はただの遊覧用なのかもしれない。
「操縦はこのシープットが出来ますので」
紹介された大きな荷物魔人、もとい、シープットが会釈する。相変わらず控えめな奴だ。
気付くと辺りに見慣れた顔が集まってきていた。
先程挨拶を交わした商人夫婦とその息子、そしてタイガーウォンをはじめとした治安維持協会員の面々、ゲーン……。他にもあまり覚えていない顔も多い。俺達が介抱した冒険者等も混ざっているに違いない。
「早いとこその危険な獣を元に戻してやってくれ」
タイガーウォンが治安維持協会員らしい台詞を吐く。その凶悪な顔には似合わないが、子猫の姿を思い浮かべるとそれ程凶悪な顔に見えなくなる辺りが不思議だ。
「なぜか森を覆っていた不気味な霧が晴れたんだ……」
ゲーンが呟いた。
秋留がネクロマンサーの力で浮かばれないカップルの霊を供養したのかもしれない。
「そろそろ行きますかな」
ジェットが言った。
パルメザンの話だとこの魔動船を使えば約三日でアステカ大陸の港に到着出来るという事だった。小さい分、速さ重視という事なのだろう。椅子の座り心地も良さそうだ。
「毎日手紙を出すんだぞ～」
パルメザンがクリアに手を振って無茶な事を言っている。冒険の途中に都合よく手紙が出せる訳ないと思うのだが、その辺の事情は理解出来ていないらしい。
俺達は魔動船、ジェット・レッジャーノ号へと乗り込んだ。シープットが操縦席で何やらボタンやハンドルを操作している。
軽快な音を立てて魔動船のエンジンが稼動したようだ。船全体が

小刻みに揺れる。
俺は改めて船に乗ったメンバーを見渡した。
まずは愛しい秋留、どこから取り出したか不明な茶を飲んで落ち着いているジェット、またしても失恋したらしい銀星……。一時的に俺達と仲間となった暴れん坊を彷彿とさせるクリア、そしてその付き人シープット……。
溜息を付いて船の前方を見ると、腹を出して寝ている獣のカリューとその隣に身体を丸めて寝ている紅蓮、そして操縦席を珍しそうに眺めているタトール……。
思えば一気にメンバーが増えたものだ。人間種族が四人、その他の種族五匹か。世にも奇妙な大パーティーだな。
俺はこの先の旅に沢山の不安を覚えながら、遠ざかる海岸を見つめた。
「予想通り、ゆっくりなんて出来なかったね」
秋留が呟いた。
「俺達冒険者に安息の地なんてないんだろうな」
「詩人じゃん」
俺の回答に秋留が茶化す。
「アステカ大陸ですなぁ……久しぶりですじゃ」
「あれ？　ジェットは行った事があるの？」
秋留が聞いた。俺もジェットがアステカ大陸に行った事があるなんて知らなかった。
「ええ。魔族と戦闘を繰り広げながら色々な大陸に行きましたからなぁ……」
ジェットが遠い眼をする。
確かにジェットにとっては遠すぎる日の記憶だろう。生前の記憶……。
「アタシ、楽しみ！」
クリアが秋留に抱きついて会話に加わってきた。こいつ秋留にくっつき過ぎだ！

「そうだね。せっかく夢にまで見た冒険に出れたんだから楽しくしないとね！」
秋留が請け負った。
俺にとっては決して楽しくはない旅になりそうな予感がしてならない。胃、胃が痛いぞ。
「それにしても大人数になったもんだよなぁ……全員で九人パーティーか」
「へ～、そんなに増えたんだぁ！」
秋留が辺りを見渡した。クリアも秋留にならって辺りをキョロキョロと見渡す。そうやって同じような行動と取って並んでいると仲の良い姉妹のようにも見える。
「あれ？」
秋留が呟いた。
「ブレイブ、数え間違いしてるじゃん！」
「え？」
盗賊であるこのブレイブの眼で数え間違いなど起こるはずもない。俺は改めて辺りを見渡した。
……やっぱり九人だけどな。

パリンッ。
パシンッ。

ん？
今の音は何だ？
「あ～、これが有名なラップ現象だね」
秋留が嬉しそうに言った。
え？
「紹介してなかったね。新しく私達の仲間となったツートンとカーニャア」
ピシッ。

パシッ。
まるで挨拶でもする様に不気味なラップ音が辺りに響いた。
「ま、まさか……身投げしたカップルを連れてきたのか？」
俺は恐々と周りを見渡して秋留に聞いた。
「だって、あんな所で人々を呪ってたって勿体ないし、可哀想でしょ？」
秋留が何もない空間を撫でる。
何かが見える。
うっすらと秋留に頭を撫でられている二人の男女が……。
「皆でアステカ大陸を遊びつくそう～！」
『お～！』
秋留の叫びに全員が各々の返事をする。雄叫びやら不気味な音やら。
俺は一人呆然としながら、新大陸での冒険を想像して泣きたくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0334d/

盗賊ブレイブ@海賊の犬

2010年10月8日14時39分発行